

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.176

2019/10/1

【毎偶数月1日発行】



発行者の住所：〒108-0073 東京都港区三田3-4-17-206 TEL:03-6435-2030 FAX:03-6435-2031

Eメール：info@iken30.jp ホームページ：https://www.iken30.jp

郵便振替：00120-9-359506 市民の意見30の会

*隔月刊/普通会員(購読料・送料とも)年2500円、協力会員年5000円、敬老・障がい者会員年2000円、1部頒価400円。

保の家は貧しかったから
美術学校へはゆけなかった。
でも野田醬油につとめてからも
保は好きな絵を描きつづけた。
いったったか、幼い妹を連れて
熊谷守一画伯のところへ絵を
見てもらいにいったこともある。
また、やはり妹といっしょに
上野の美術館へ行きゼナンヌや
ゴッホを見たこともある。
昭和十年に結婚し



「静物」戸邊 保

一男一女をもうけてすぐ
非情な召集令状がやってきて
千葉県佐倉から中国戦線へ……。
兄を慕う妹は同じ会社就職し
奉天の職場にまわされ
旅順の二百三高地で兄と再会。
話の内容は
のこしてきた子供のこと
描きたい絵のことばかりだった。
兄妹はたゞ手をふって別れた。
〔戦没画学生「祈りの絵」第三集 無言館の詩より〕

市民の意見 176号 目次

巻頭詩「謝れ」

イヴ・エンスラー

2

■特集 記憶を刻み歴史を受け継ぐ

朝鮮戦争に「参戦」した日本人
―ある船員の語りと記録を通して考える―

五郎丸聖子

4

「この世界の片隅に」と植民地主義(上) 植松青児
まだ連帯じゃない

8

―8月ソウルに行ったこと

岡本朝也

12

● (象徴天皇教の祝祭ナショナリズム) 批判

―新天皇「即位」問答②

天野恵一

15

◆運動の現場から

紛争地で始める平和教育

―ピースセル(平和の細胞)を広げる 高遠菜穂子

19

あぶない、うるさい、都心低空飛行はNO!

増間碌郎

22

● 重度障害者議員誕生に拍手!

庭を切り取り「リニア」が通る

太田修平

24

◆文化

連載エッセイ73回 「身近な工作者」

鈴木一誌

29

映画の紹介

「アンナ・マニエ」の疾走

―「無防備都市」を回顧する

本野義雄

34

本の紹介

『で、オリンピッククやめませんか?』 宮崎敏郎

30

『戦争の記憶 コロンビア大学特別講義』 細井明美

31

まんが ふしぎの国のありか⑧ まつだたえこ

36

◆情報

事務局だより 32 市民意見広告運動

33

読者のおたより 34 会計報告 35 編集後記

36

題字 安西賢誠 印刷・レイアウト (有)山猫印刷所

謝れ

イヴ・エンスラー
共訳 許玉汝／小川和子

私たちの話は私たちの頭の中にだけ存在する
蹂躪された私たちの体の中にだけ
戦争の時間とがらんどうの空間の中にだけ
どの様な公式的な記録も文書も跡形も無い
ひたすら良心だけ
ただそれだけ

私たちが約束されたこと…
私が彼らについて行けば父を助けられる
仕事につくことができる
国のために働ける
行かなければ私を殺すという
そこがもつと良いという

私たちがみつけたもの…
山も無く 木も無く 水も無く
黄砂 砂漠 涙でいっぱい
数千名の心配事だらけの少女たち
私の編んだ髪は切られ
下着をつける時間も無かった

私たちがさせられたこと…
名前を変えさせられ
ボタンの外しやすいアッパッパを着せられ
一日に50人の軍人の相手をさせられ

生理の時もさせられ

服も脱がず男根だけを出す軍人ともさせられ
あまりにも多くの男を相手にして歩けなくなってもさせられ
足を伸ばすことも体を曲げることができなくてもさせられた

彼らが私たちに繰り返したこと…
ののしり

殴り

血まみれになるまで腹をえぐり

消毒して注射してまた殴り

穴をあけ穴をあけ

私たちが見たこと…

浴室で化学薬品を飲んだ少女

爆弾に当たり死んだ少女

銃に撃たれさらに撃たれた少女

壁に頭を打ち付けた少女

溺死するように川水に放り投げられた栄養失調になった少女の体

私たちに許されなかったこと…

体を洗うこと

出歩くこと

医師の診察を受けること

コンドームを使うこと

逃げること

赤ん坊を守ること

やめてと言うこと

私たちが貰ったもの…
マラリア 梅毒 淋病 死産 結核 心臓病 精神発作 憂鬱症

私たちが食べたもの…

飯 味噌汁 たくわん 飯 味噌汁 たくわん 飯 飯 飯

私たちがなったもの…

破壊され

道具になり

不妊になり

穴になり

血だらけになり

肉の塊になり

追放され

沈黙され

一人ぼっちにされ

私たちに残されたもの…

決して消すことのできない衝撃

死んだ父

無賃金

傷跡

男への憎悪

子もなく

家もなく

空っぽになった子宮

酒癖

罪の意識と羞恥心
何も 何も！

私たちにつけられた名前…

慰安婦 墮落した女たち

私たちが感じたこと…

私の胸は今も震えている

奪われたもの…

春 私の生！

私たちは今、74歳 82歳 93歳

目は見えなくのろいけど準備はできている

毎週水曜日日本大使館前でこれ以上恐れること無く

私たちが願うこと…

今すぐに

私たちの話がこの世から消える前に

私たちが死ぬ前に

日本政府よ 謝れ どうか

慰安婦の女性たちに悪かったと

私に謝れ 私に悪かったと謝れ

私に 私に 私に！

謝れ！ 悪かったと謝れ！ 悪かったと！

■詩の作者について■

イヴ・エンスラーはアメリカの作家、詩人。代表作「ヴァギナ・モノログ」は女性への暴力を止めようという世界的な市民運動（V-DAY）を巻き起こした。

瓦礫の中で何かを探す女性と子ども（米陸軍アーカイブより）



朝鮮戦争に「参戦」した日本人

——ある船員の語りと記録を通して考える

五郎丸 聖子

はじめに

2018年4月に朝鮮半島情勢が大きく動きだしたことで、日本でも朝鮮戦争の歴史の経緯を振り返る報道が増え、朝鮮戦争への日本人の関与についてもフォーカスされるようになった。民間船員の動員の実態や、最近では、軍属として前線に赴き「戦死」した日本人についても報じられた。

わたしが、朝鮮戦争に関わった日本人の存在を知ったのは、三宮克己さん「Ⅰ」の朝鮮戦争体験記を聞いた2013年のことだ。三宮さんはLST乗組員として朝鮮戦争に関わった。LSTとは「Landing Ship Tank（戦車揚陸艦）〔2〕」の略で、戦車と兵員を積んだまま海岸に乗り揚げ、それらを揚陸させ、敵前に橋頭堡を築くために使用される船のことである。これに乗り組むということは、敵前上陸を敢行した場合、敵に攻撃されて艦と運命をともにする可能性を孕んでいた。

1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争は、1953年7月27日にアメリカが主導

した国連軍司令部の代表と朝鮮民主主義人民共和国の軍、中華人民共和国の志願軍によって休戦協定の調印がなされた。大韓民国は調印しなかった。この日からあまりにも長い停戦状態が続いている。

では、朝鮮戦争は日本にとってどのようなものだったのだろうか。冷戦状況の深刻化の象徴とみられた朝鮮戦争は、実質的に日本の占領統治を担っていたアメリカに、日本の再軍備と単独講和を推進させ、在日米軍を固定化させた。「平和憲法」との矛盾を抱えた戦後体制はこのときから始まったのであり、朝鮮戦争はその後の戦後日本のあり方を規定したターニングポイントであったといえるだろう。

その一方で、朝鮮戦争の発端の根幹にあった日本による植民地支配については、連合国から不問に付されたこともあり、当時の日本社会がそこに向き合うことはなかった。そのため、現在に至るまで、朝鮮戦争に対して、その意味での当事者意識を持つ人はほとんどいない。このような状況をふまえると、朝鮮戦争への日本の関与の

実態を知ることとは、現在の日本社会にとって大きな意味を持つといえるだろう。

2013年に三宮さんの朝鮮戦争体験記を聞くまで、わたしは、「1950年に朝鮮動乱が起きた」だとか、「朝鮮特需で日本経済は持ち直した」などほんの数行、記述することで朝鮮戦争をわかったつもりでいた。だから、三宮さんの話を聞いたとき、これまでの自分の想像力のなさに愕然とした。同時に、そのように想像せずにいられたことにこそ何か戦後の日本社会を見つめ直すポイントがあるような気もした。

戦後日本は、憲法9条を持つ「平和国家」であった。にもかかわらず、実質的に戦争に参加していた日本人がいた。それは何を意味していて、そのことを今どのように捉えるべきなのか。これらを考えるとき、朝鮮戦争に「参戦」した人たちの体験と想いは示唆を与えてくれる。以下では、朝鮮戦争の体験者の一人である三宮克己さんの語りと記録を通して、日本にとっての朝鮮戦争について考えてみたい。

LST乗組員・三宮克己さんの体験

1945年8月、三宮さんは朝鮮半島の鎮海海軍基地で敗戦を迎えた^{〔3〕}。10月初め、引揚船で博多に上陸し、佐世保で復員兵の帰還輸送に応募し、南方からの引き

揚げ輸送に従事した。その後しばらくして、LSTに乗船することになった。

1950年6月のある日、 Guam島から自動車のスクラップを積んで帰航中の小笠原付近で、「朝鮮で戦争が始まった。至急荷物を横須賀にあげて横浜ドックに入れ」という無線が入った。大急ぎでドックに入り、船を兵員輸送用に改造し終えると^{〔4〕}、米兵たちがジープでどんどん乗り込んできて、直ちに出発だといわれた。どこに行くのかわからない。「とにかく走れ」といわれ、横浜沖まで行くと、「朝鮮に向かえ」という連絡が来た^{〔5〕}。米兵約200人と車を積んだ船内は緊迫と不安な状況が充満していた。

戦後日本の海運管理体制

朝鮮戦争における兵員や軍事物資の海上輸送には日本海運が大きく関わった。敗戦後、日本の海運管理体制は、運輸省海運総局と船舶運営会に移管された。船舶運営会とは国家総動員法に基づく特殊法人で、海運企業の経営者を中心に構成されていた。

戦時体制のためにつくられた船舶運営会は、本来なら敗戦とともに解散されるべきだったが、戦後も諸物資の配給・輸送統制が続けられたことと、在外邦人引き揚げ問題もあつて存続したのである^{〔6〕}。

1945年9月2日の降伏文書調印後、100総トン以上の船舶の運航は、連合国最高司令官（以下、SCAP）と連合国最高司令官総司令部（以下、GHQ）の管理下に置かれた。10月、SCAPはSCAJAP（Naval Shipping Control Authority for Japanese Merchant Marine）日本商船管理局を設置し、日本商船の配置・運航・修理・造船など海運業全般をここで管理した^{〔7〕}。また、GHQはSCAJAPの統制業務を容易にするため、日本船主、代理店業者、港湾荷役業者などで構成されるCMMC（Civil Merchant Marine Committee）日本商船管理委員会^{〔8〕}の設置を日本に命じた。日本政府は既存の船舶運営会にその機能を持たせることを提案し、承認された^{〔8〕}。SCAJAPの下部機構として海運の国家管理を継続したことは、戦時管理体制の解体を求めた占領政策に逆行する措置だったが、複雑な状況に対処するための現実的な方法でもあったのである^{〔9〕}。

朝鮮戦争への協力で復興する日本

朝鮮民主主義人民共和国の軍が北緯38度戦を超えて始まった朝鮮戦争は激しさを増し、同軍は急速に南下。50年6月28日にはソウルを占領した。大韓民国の軍とその支援をする国連軍は半島の南端に追い詰めら

れた。避難民で釜山の街があふれ返り、岸壁付近には戦車、トラック、積み上げられた貨物がびっしりと置かれ、荷揚げ人夫、移動する兵士たちでごった返す様子を三宮さんは目撃している。

「日本の軍需産業はどんどん復活していく。ですから、韓国の現場で働いている人たちは自分たちが応援してもらっているというよりは、もう腹立たしくなるわけですよね。自分たちが逃げ惑っているときに、日本からどんどんそういうの（トラック、携帯食料などの物資・筆者）を送ってくるというので。……インテリなんかこう言ってますよ。「日本は戦争さままですすね。このおかげで日本はたちまち復興ですな」って[10]。」

一方で、日本に戻ると、

「佐世保の方では、あれだけ焼け野原になっただけ、こういうことを言うんですね。「やっぱり戦争があった方がいいな。こんな景気がいいじゃないか」って。もう佐世保の街なんか沸き返るような景気なんです。焼け野原にバラックがばんばん建って、呑み屋ができて、ダンスホールができて、米兵たちがそこで朝鮮に行く前にあり金全部使っていくというもんですからね、ものすごい景気なんですよ[11]。」

小倉、門司、佐世保などにはバラックやスーベニアショップが出現していた[12]。日本は兵站基地の役割を担うことで復活し始めていたのだ。日本と朝鮮半島を往来する三宮さんは、両者の朝鮮戦争に対する認識のとてつもない温度差を感じた。

仁川上陸作戦——おれは人を殺している

9月に入ると、国連軍は、巻き返しをはかるため仁川上陸作戦を実施する。この作戦には、日本人が乗ったLSTも37隻、参加している。LSTは、アメリカの第1海兵師団と第7師団を乗せ、神戸・横浜・釜山から仁川に向かった。神戸からは66隻の貨物船も出帆した。

「貨物を運べばいいと思っていた」船員たちは、「仁川上陸という本格的な戦闘参加に際しては船内で大議論になった」という。

さらに三宮さんは続けた。

「私どもの先輩たちはかろうじて生き残った（アジア・太平洋戦争で筆者）人たちで、2回、3回と撃沈されて泳いで助かったような人たちですから、この戦争にものすごく反対したんですよ。（中略）「また戦争なのか。おれは船乗りやめるんだ」[13]。」
と言った人もいた。だが、結局、占領軍

の命令には逆らえないという結論に至る。三宮さんが乗船したLSTが運んだ部隊は日本から来た米軍部隊と合流し、さらに国連軍の連合艦隊は各国の軍艦と輸送船などが200隻ほどの大船団を組み、これらが仁川に集結した。15日早朝、先遣隊が月尾島を制圧し、次の潮を待って、夕方にはLSTから海兵隊が上陸を開始した[14]。

「突撃命令が出て全速力で岸へ向かって走っているとき、「着いたらどうなるのか、撃ち返してきたらどうなるのか」。米兵たちも船乗りたちもみな押し黙ってじーっと前方を見つめていました。岸では海兵隊が橋頭堡をつくって待っていて、そこからの信号に従ってドーンと船をつけました[15]。」

夜が明けて上陸した三宮さんは、兵士の遺体を目の当たりにする。

「トーチカに共和国側の兵士が火炎放射を浴びて真っ黒になって死んでいました。全身真っ黒だけど、唇だけが赤かった。足元には「山岳戦提要」と書かれた冊子が落ちていました。黒い死体と白い冊子にギョッとして、「ああ……、おれは何をしているのか、人殺しの手伝いか」。（中略）はじめて「人殺しをしてるんだ」と思いま



した。恐怖心と腹が立つのとで、捨て鉢な気持ちがいっそう高ぶってきました。みなそうだったと思います。だから、二カ月にいっぺんくらいの補給で日本に帰ると、みな酒をガバガバ飲んでね。つらい酒でした〔16〕。

おわりに

こうした活動の中で犠牲は生じなかったのか。特別調達庁の調査によれば、特殊港湾荷役者の業務上死亡1名、業務上疾病79名、その他21名（死亡者3名含む）、計101名。特殊船員の業務上死亡22名、業務上疾病20名、私傷死4名、私傷病208名、計254名。その他朝鮮海域等での特殊輸送業務従事中の死亡者26名（港湾荷役

4名、船員22名）〔17〕。以

上は朝鮮戦争勃発から半年後の調査結果であり、半年で56名が亡くなったことになる。

こうした事実にあれた後に、三宮さんは次のように述べている。

「よく、「日本は戦後ひとりも殺していない、殺されていない」

というけれど、実は平和憲法の下で死者を出しているということを知っておかないといけない」〔18〕。

ここまで、三宮克己さんの体験を通じて朝鮮戦争への日本人の「参戦」の一端を見てきた。こうした事実は、上述の三宮さんの言葉にあるように、日本社会で共有されてきた「戦後日本」のあり方を根底から覆すものであった。それは、国家が個人の意思を尊重することなく戦争に関与させ、そのことを隠蔽してきたからなされたことだったわけだが、そのような事実は広く知られることがないままに現在まで来ている。

だが、「そのような事実があった」ことを知ったとき、「そのような事実」が隠蔽され、個人の意思が尊重されない状況に対して、今度は、自分自身がどのような態度をとるのが問われることになる。三宮さんの言葉はそのような重たい問いかけだったと思う。

（ごろうまる・きよこ／日本近現代史研究者）

注

〔1〕1927年朝鮮生まれ。1950年朝鮮戦争が勃発するとLSTの乗組員として戦争に動員される。2004年から始まったイラク派兵違

憲訴訟では原告として朝鮮戦争での体験を証拠として提出した。2017年11月11日に逝去された。

〔2〕主として2700総トン、船倉に戦車約40台積載可能。船倉上部に兵員165名を収納できる居住区あり。桃澤陽二（2007）「朝鮮戦争と日本人船員 其の一」『海員』2007年8月号、P.82（以下、桃澤（2007）①）

〔3〕三宮克己（2016）「海風気風 語り継ぐ海上労働運動史12」『羅針盤』第19号、P.12

〔4〕引揚輸送用に改造していたLSTを元の形に戻したということだろう。

〔5〕三宮克己（2015）「朝鮮戦争従軍記」日本は朝鮮戦争で何をしたのか」講演録、むさしの科学と戦争研究会（以下、「科学と戦争」）。

〔6〕桃澤（2007）①、P.84（同〔2〕）

〔7〕桃澤（2007）①、P.84（同〔2〕）

〔8〕桃澤（2007）①、P.84（同〔2〕）

〔9〕三和良一（1992）『占領期の日本海運』日本経済評論社、PP.88-89

〔10〕「科学と戦争」同〔5〕

〔11〕「科学と戦争」同〔5〕

〔12〕三宮克己（2015）「わたしは朝鮮戦争に従軍した②」『思想運動』2015年5月15日（6）（以下、三宮（2015）②）

〔13〕「科学と戦争」同〔5〕

〔14〕桃澤陽二2007「朝鮮戦争と日本人船員 其の三」『海員』2007年10月号、PP.85-86

〔15〕三宮（2015）②（同〔12〕）

〔16〕「科学と戦争」同〔5〕

〔17〕占領軍調達史編さん委員会（調達庁内）編（1956）『占領軍調達史—占領軍調達の基調』調達庁、P.576

〔18〕三宮克己（2015）「わたしは朝鮮戦争に従軍した 最終回」『思想運動』2015年6月15日（5）

「この世界の片隅に」と植民地主義（上）

植松 青児

広島は軍都だった。侵略戦争の大拠点「広島」だった。だから20世紀の広島を歴史を語ろうとすれば、加害と被害が錯綜した、複雑な歴史と向き合わざるをえない……はずだが、多くの「広島」についての語りは、そのような構成にはなっていない。

アメリカの歴史社会学者キャロル・ゲラックは『戦争の記憶』（講談社現代新書、2019年）の中でこう述べる。「日本とアメリカで語られる原爆についての一般的な記憶は、それぞれ半分ずつ抜け落ちている（略）両方の国が、原爆の物語を半分しか語らない。まるで、日本はヒロシマ以前の出来事を軽く飛ばしているようであり、アメリカはナガサキ以後に起きたことにはほとんど触れない」

8月6日以前の広島が語られる場合も、その多くは8月6日以降の「ヒロシマ」の悲劇を際立たせる「伏線」の場合が多い。イノセントな「広島に住む」がいて、8月6日の原爆投下の惨劇があつて、そして核兵器廃絶という今後の目標が明示、あるいは暗示される。現在、これは定型化・規範

化された「ヒロシマ」の語りの一つになっている。

その「ヒロシマ」の物語では、原爆という単一の「暴力」が描かれ、その暴力の消滅が今後の目標、あるいはスローガンとして用意される。単純と言えば単純だし、明快と言えば明快だ。

ちなみに長崎についても、空襲に遭った他の都市を含めた「日本の戦争被害」の語りも、これと極めて近いかたちでの定型化・規範化がなされている。

「日本の戦争」と「語り直し」

しかし、そのような「語り」のままで良いのか。語り継がれるべきは、原爆という単一の暴力だけで良いのか。十分なのか。

例えば、現在の日韓両政府の深刻な軋轢は、徴用工訴訟問題が大きな契機になっているが、その訴訟の一つは三菱重工の広島と名古屋の両工場に動員された元・徴用工たちが原告として起こしたものである。この人たちが8月5日までの「広島」で体験した暴力は、「ヒロシマ」の物語の「外」



『この世界の片隅に』（この史代作、双葉社）

なのか？ それとも、それらの体験を「内」に取り込めるよう、「ヒロシマ」の語り直しを試みるのか？

あるいは、現在観光名所の一つになっている広島城（鯉城）は、8月6日までは陸軍第5師団の司令部があり、そして同師団は中国で、マレーで侵略戦争の一翼を担っている、という歴史的事実がある。これらは日本の外側で同師団が行った行為だから「ヒロシマ」の物語の「外」なのか？ それともこれらも含めて「ヒロシマ」を語り



しかし映画版で原作に触れた人は、もともとの原作作品であるこの史代氏の漫画作品にぜひ目を通してほしい。原作者が米軍による空襲・原爆以外のさまざまな「暴力」を意識的に描き込んでいることに気づくはずだ。それも、2019年のいま

でも多くの自主上映会が行なわれている。映画版を観たこれら数百万人の多くが、日本の戦争被害物語の「典型」として（あるいはその進化形として）作品を受け入れたことは想像に難くない。

ここまでラジカル（根源的）な「日本の8月15日」の描写は、日本の戦争被害の物語の中にこれまであっただろうか。極めて稀なシーンである。

しかも、わずか45年6月の呉空襲で投下された時限爆弾で右手を吹き飛ばされる大怪我を負っている。実家である浦野家の肉親も広島原爆、つまりアメリカ軍の「暴力」により深い戦争被害を受けている。そ

原作では、1945年8月15日、「玉音放送」を聴いて納得できない気持ちのすずは、畑に水やりに出たときに「太極旗」を目にする。「光復」が訪れたことを祝う朝鮮人住民の姿を、まずは軍港の街・呉の片隅で目にするのだ。そしてすずは驚きもせず、狼狽もせず、瞬時に思考をめぐらし、自らの戦争観や国家観を大きく切り替えていく。「ああ」「暴力で従えとったいう事か」「じゃけえ暴力に屈するいう事かね」「これがこの国の正体かね」。

大きな問題となっている（徴用工など）朝鮮人強制労働動員問題や、軍専用性施設と性労働者・性奴隷（慰安婦）などといった、大日本帝国による暴力の問題にも踏み込んで、作品の片隅に描いているのだ。

その典型が、「玉音放送」の直後に主人公の北條すずが見る「太極旗」の存在である。

とを試みた作品であり、いくつもの大きなヒントを私たちは得られると思う。

「え？ あの作品が（日本の戦争を語り直す）ヒントになるの？」と感じた読者の方もおられると多いだろう。というのは、「この世界の片隅に」という作品は一般的に「日本の戦争被害」ものの典型・定番、つまり「語り直し」の正反対にある物語として受容されているからだ。

実際、映画版「この世界の片隅に」は、2016年の上映開始から200万人以上の観客を集め、さらにこの8月にNHK総合で放送され、各地の平和運動系イベント

8月15日の呉に現れた太極旗

さて「この世界の片隅に」である。この作品は広島や日本の戦争を「語り直す」こ

ういった被害当事者のさすが、植民地主義の終焉を祝う「他者」と会い、日本の帝国主義・植民地主義、帝国主義戦争の「敗戦」、加害国、帝国主義としての日本の実像に気づく……そこまでの大胆な「語り直し」、加害と被害が重層的に重なる物語を、この氏は選り取りしているのがある。

安直に改変した映画版

ただ、映画を観た人の多くは、私がいま述べたことに対して大きな違和感を抱くか



1945 年、呉市戦災消失区域図（国立公文書館資料より）

もしれない。「太極旗？ そんなのありましたっけ？」「この国の正体」なんて独白、なかったと思いますが……」それもそのはずで、映画版のこのシーンは、原作を多少改変して描かれているのである。

原作では太極旗がコマいっぱい描かれ、読者はその存在をしつかり確認できる。しかし、映画では畑の向こうに小さく太極旗が描かれたシーンがあるのみで（しかも数秒で次のシーンに移る）、原作を予め読んでいなかった観客にとっては、容易には気づかれないように描いているのだ。

さらに、すずの独白は大きく書き換えられている。すずはこのように独白する。

「海の向こうから来たお米……大豆……そんなそんで出来とるんじゃろうなあ、うちは。じゃええ暴力にも屈せんとならんのかね」

かなり不自然な改変である。どうして、映画版の監督を務めた片渕須直氏はこのような改変を行ったのか。片渕氏はあるインタビューで次のように説明している。

「終戦直後に進駐軍がやってきて日本人の意識調査をやっているんですね。いろんな町でいろんな階層の人にどう思っているのかを聞いているのですが、ほとんどの人がどうも大義とか正義で負けたとは思ってなくて、単純に科学力と物量で負けたって

いう悔しさがあるんじゃないかって……。もしそうなら、あのシーンですずさんは日本という国をいきなり背負わなくてもいいんじゃないか？ と思ったんです。彼女の身のうちのこと、同じように悔しいという理由を考え出せないかと考えたんですね」

「すずさん自身はお米を炊いておかずを作って……というのをずっとやってきて、そこに彼女のアイデンティティがあった訳です。ならば、ごはんのことで原作のようなことを、彼女のことを語れないかと考えたんですね」

「実際、その当時の日本本土の食糧自給率ってそれほど高くなくて、海外から輸入している穀物がなければやっていけなかったんですよ。そういうのがわかると、やっぱりすずさんは生活人だから、あのような反応をしたほうがいいと思ったんです」

つかみどころのない説明だ。何度も読み返して、日本の「国力」の弱さ、「内地」では自分たちが食べる米や大豆も十分に生産できず、海の向こうからの輸入品に依拠せざるを得ない、そのような《国力の弱さ》ゆえに主人公すずは「（アメリカの）暴力」に屈せざるを得ないと考えた……というシーンに改変したことが理解できた。

片渕氏は「ごはん（食糧をモチーフに）

原作のようなことを「語ろうとした」と述べているが、実際には明らかに「原作のよ
うなこと」とは全く異なることを主人公す
ずに語らせている。映画版では、まずは「太
極旗」を見て泣いていない。国力の弱さゆ
えにアメリカの暴力に屈したことに悔し泣
きしている。そもそもまずは太極旗を見て
思考をめぐらせているのかも疑わしい。朝
鮮人に対する日本人の加害についても思い
をめぐらせていないかもしれない。太極旗
に気づかなかったのでは、とすら思う。

要は「原作のような」どころか、原作に
あった日本人と朝鮮人の加害＝被害の關係
性の視点をほぎ取って、アメリカの加害＝
日本の被害の關係性だけで描かれる、典型
的・定型的「日本の戦争被害」の物語、他
者の視点が差し込まれない「日本人だけ」
の終戦の物語に、この作品を再回収してし
まったのではないだろうか。

戦後日本と「未発の可能性」

もし映画版が原作の「太極旗」のシー
ンを忠実にすくいとっていたら、どうなっ
ていただろう。映画の上映館数や観客動員数
は少なくなっていたかもしれない。NHK
が同作を放映することもなかっただろう。
自主上映会は広く行なわれただろうか。「反
日」的作品を教育委員会が後援するのはけ

しからん、という抗議の「電凸」が殺到し
たかもしれない。

それでも、と思う。原作の「太極旗」を
見た後のすずの態度、すずの思考は「本来、
日本の戦後はこうあるべきだった」こと、
言い換えると戦後日本の「未発の可能性」
を示唆しているのではないか。

戦後の日本は植民地主義の「被抑圧者」、
植民地主義からの解放＝「光復」を祝う人
と出会い、そこから戦争観、国家観を考え
直すべきだった。帝国主義の国家として他
者を「暴力で従え」、より強大な帝国主義
の「暴力に屈した」歴史を認識すべきだっ
た。そこから日本の「戦後」を始めるべき
だった。そこから始まっていけないからこそ、
韓国・朝鮮・中国への嫌悪や軽蔑が今の日
本にあふれかえっているのではないか。

ところで、主人公すずがそこまで深く洞
察し、思考を巡らせたことを「唐突すぎる」
と感じる人もいるだろう（片淵監督もそうか
もしれない）。しかし筆者はその考えに与し
ない。というのは、この作品の前半には、
すずの故郷である広島市江波が、軍都広島
に蹂躪されていく、言い換えると「国内植
民地」化されていくプロセスが描かれてい
るからだ。すずをはじめ江波の住民は、自
国の帝国主義によって「暴力で抑えつけら

れる」出来事を体験しているのである。（次
号ではその点について解説する）

（うえまつ・せいじ／雑誌編集者、広島原爆被爆3
世）

▼表紙絵の作者▲



戸邊 保
（とべ・たもつ）

1910（明治43）年12月28日、千葉
県東葛飾郡野田町（現・野田市）に生まれ
る。野田尋常高等小学校高等科を卒業。
野田醤油株式会社（現・キッコーマン株式
会社）に勤務しながら、独学で絵を勉強
する。1942（昭和17）年3月頃、応召。
静岡県三島の野戦重砲隊に所属したの
ち、千葉県佐倉連隊に入隊。中国黒龍
江省の阿城県に駐屯する。1944（昭
和19）年8月19日、フィリピン移送中に
九州沖で爆沈され、戦死。享年34。

まだ連帯じゃない

——8月ソウルに行ったこと

ソウルの集会に一人で参加する

ソウルの地下鉄はホームも車両も大きく、大阪の地下鉄の1.5倍くらいの広さがある。それでも、A1サイズのボードに貼ったポスターと、トランクに詰め込んだ

1000枚のビラを持って乗るのは気が引けて、カンファムン（光化門）駅方面に向かう電車の中で、僕はドア脇のスペースに縮こまっていた。落ち着いてみると、電車は意外とすいている。2019年8月10日、午後4時半。夏の土曜日の夕方に地下鉄で都心の方に向かおうという人はそんなにいない。それでもポスターの「No Abe」と書かれた面は自分の側に向ける。公共交通機関の中なのだ。政治的アピールは見たくない人がいるかもしれない。

ふと「犀の角のように一人進め」というフレーズが脳裏をよぎる。春に韓国に住む友人が高麗美術展にゆき、遺物に書かれていた言葉の現代語訳の写真を送ってきてくれたのだ。ハングルを一所懸命訳してから、僕はそれが『スッパニパータ』に記された

岡本 朝也

釈迦の説法の一部であることに気付いた。「獅子のように恐れず進め／風のように捕らわれず進め／犀角のようにひとり進め」。唱えやすいように短くして、何度か口ずさんでみる。

列車はソデムン（西大門）駅を通り過ぎる。日本の朝鮮総督府があゝの悪名高い西大門刑務所をつくったところだ。カンファムン（光化門）駅に着くと、自分が猛烈に怖気づいていることに気付く。住んでもいいのに韓国で政治集会に参加するなど、無謀もいところではないか。しかも、言葉が通じないのにビラまで撒こうとしている。

なんとか元氣を出してスマホで「少女像」の場所を調べ、検索結果で指示された通り、2番出口に向かう。日本大使館への角を曲がると、もうすでに路上に人が集まっているのが見える。大きな道を、ちょうど日本大使館の真横で閉鎖してステージを設置し、「安倍糾弾ろうそく文化祭」を準備しているのだ。近づいていくと、ステージではリハーサルが行われていて、右手のビルの前のスペースに早くからやってきたと

思しき参加者の人たちが集まっている。

出迎えなどはない。とりあえず、ビルの前の植え込みの陰で荷を下ろす。ポスターを立てかけ、ビラの入ったトランクを開く。周りは年配の人ばかりだ。少し離れたところで、集会に参加するのか、大学生くらいの人たちの団体がアピールの練習をしている。誰も話しかけてはこない。もつとも、話しかけられても僕の韓国語で対応はできない。やれやれ、行き当たりばったりは僕のスタイルではあるのだけど、これはさすがにちよつときつくないか。1000枚のまだ折っていないビラを見て、僕はため息をつく。

一週間で3千名の署名が集まった

ことの発端は、もちろん安倍政権だ。7月の下旬、安倍政権が次々に韓国を敵視する政策を打ち出していたとき、僕は韓国在住の日本出身の人たちが自分たちの声明を準備しておられるのに加わった。韓国で日本出身者が安倍政権に反対するというのは、日本政府を批判しつつ、日本とつながりのある自分たちの存在を受け入れてほしいと訴える必要もあるという点で、日本で活動するのは違った難しさがある。

家事や育児、仕事などで忙しい在韓の人たちと一緒に、声明を日韓英の三か国語で



日本語のバナーを持ってアピール（筆者は左から2人目）

用意し、賛同を募り、一般に公開する。そこまでは順調だった。驚いたのは、韓国でネットに公開した後の反応だ。「まず自分の国のことを心配しろ」「我々は植民地支配の歴史を忘れない」「日本人と一緒にするな」……もつともだとしか言いようのない、しかし表現を練りに練った声明をほとんど読まずに書いたと思われる韓国語のコメントが並んだ。僕が期待していたような「共に頑張らしましょう」というようなコメントはごく少ない。これは、かなり多様な人々が関心を持つ事態になってきたな、という

のが僕の印象だった。ここ20年くらいの韓国社会の対日関係とは明らかに違っている。

けれど、僕の実感には日本社会には共有されなかった。リベラル派の知識人からも「日韓双方に問題がある」というような発言がされるのが普通だった。8月のはじめ、問題意識を共有していた何人かで声明文を用意することにした。韓国大法院の「徴用工判決」をきっかけに作られた日韓の対立においては、非は全面的に日本政府にあるというのが僕らの認識だ。日本に蔓延する韓国・朝鮮への蔑視や偏見にも触れ、日本人、在日コリアン、日本に住んでいない人などすべての立場を包含する「日本にかかわりを持つ市民たち」という名前で発信することにした。

再び驚かされたことに、仲間たちがメーリングリストに流すと、多数の反応があった。実は、僕は声明を公開した直後に、夏季の短期語学研修のために韓国に旅立ったのだが、ソウルから確認すると、署名は1週間ほどで2000件を超え、3000件に迫る勢いになっていた。韓国と日本で、立場や表現の仕方は違うけれど、日本政府への怒りを持っている人がたくさんいるのだ。これを共有するのが僕の仕事ではないのか、そんな考えが浮かび始めた。

親切的なアジヨシ（おじさん）

そのおじさんが声をかけてくれたのは、A3サイズのビラを冊子体に折る作業をひとしきり進めた頃だった。もつとも、韓国の数え方ではもう50歳になる僕に「おじさん」と呼ばれても困るだろう、たぶん60代くらいの元氣な韓国人の男性だ。ポロシャツとチノパンというファッションといい、集会に少し早めに来るところといい、韓国語での呼びかけに僕が不要領に答えていると、おじさんは「日本人か？」と言い「これわかるか？」と自分たちのビラを見せてくれる。「ウリヌン イルボン クツミニ」（私たちは日本国民ではなく、安倍と安倍政権を糾弾するのだ）何とか読める。「ネー、アラッスミダ（はい、わかります）」と答えると、おじさんは僕たちのビラを読み始める。韓国在住の人たちが苦勞して訳してくれた韓国語版と日本語版の声明を両方掲載したビラだ。

目を通し終えたおじさんは、僕に握手を求めてくる。「これ、いいじゃないか」みたいな感じ。そして、おもむろに何枚か手に取って折り始める。ああ、と僕は納得する。気に入ったらすぐ支援してくれる。こういう人、日本の左翼にもいっぱいいる。気がつく、おじさんは仲間の人たちを呼

び集めている。「おおい！ここに日本から来た人がいるんだ。良いことを書いてる。折るの手伝ってくれ。それから配るのも！」

時間があつという間に経つ。主催のNGOのスタッフが僕を発見してくれて、アピールの打ち合わせ。在韓の仲間も来てくれて、僕の不安がかなり解消される。その間も、何人もの人がビラを折りながら話をしてくれる。「ウチのお爺さんも日本になあ」という言葉がころうじて聞き取れる。「俺は松坂慶子で日本語を覚えたんだ」という人もいる。

7時過ぎ、主催者への連絡から通訳まで、全部やってくれたMさんが到着。集会がはじまり、人でごった返している舞台前を通り過ぎて待機場所へ。舞台の上では「家族で来ました」という方が、子どもさんを交えて意見を訴えておられる。僕は途中のブースで配っていた「NO!安倍」シールを胸元に貼る。白地に描かれた「O」の部分が赤く彩色されていて、日の丸の意匠になっている。反対の名目だとはいえ、赤い丸をまとうのは何とも奇妙な気分だ。アピールは通訳を含めて約5分。自分たちの認識と意見、そして日本では訴える機会があまりないのでここに来た、ということをお話す。集会参加者のみなさんは、暖かく受け入れてくださる。終わってから、いくつ



光化門前での光復節の集会。プラカードの文字は「ノー、アベ！」

かのメディアの記者さんのインタビュを受ける。集会はデモに移る。朝鮮日報の本社前まで、僕も一緒に歩く。その後、僕は並んで歩いていたら若い韓国人男性3人組と飲みに行く。

安倍政権を倒してこそ・・・

「先生」という言葉が耳について離れず、デモの後、宿に戻った僕は眠れなくなっ

た。そう言ったのは一緒に飲んでいた若い活動家の男性で、学校をドロップアウトした後、非正規で働きながら独学で日本語をマスターしたのだという。今は非正規労働者の組合の中心になっている。仲間のお二人も自動車工場と教育の現場で活動している労働者。日本の状況はどうなのか、なぜ安倍政権が支持されるのか、ということをお聞かされて、僕も一所懸命に話す。

僕が大学の非常勤講師を職業にしていることを知って、（そしてたぶん年上だから）彼らは僕を「先生」と呼んでくれる。だけど、と僕は心の中でつぶやく。本当の先生はあなたたちなんだ。決して楽でない生活の中でしっかりと学んで、しんどい仕事のうえに組合活動もして、政治でもちゃんと結果を出している。僕などは声明文を読んだだけだ。

夜明け前、僕は何とか自分と折り合いをつける。安倍政権を倒す。そうだ。そうやって初めて「連帯」という言葉を使える。「先生と呼ばないでくれ」と言える。ブラインドを上げると、朝の光が差し込んできた。今日も暑くなりそうだ。

（おかもと・あさや／未来のための歴史パネル展／写真提供…筆者）

〈象徴天皇教の祝祭ナシヨナリズム〉批判

「即位の賀詞」決議との参加と

天皇条項「厳格解釈」との関係

——新天皇「即位」(代替り)問答② 天野 恵一



伝統か、宗教(神話) 儀礼か

——とともに歩けない体で、天野さん、よく動
きまわってますね。「読者のおたより」も、このとこ
ろ天皇制問題への言及が増大してますし、ここで
の天野さんの発言についても、まったく意外にも
好評ですね。

天野 「意外」ネー、チョットしつこいね
(笑)。あのサー、ホントのところ、天皇つ
てのは、宮中の祭祀では、「万世一系」の
神というアイデンティティを持って宗教儀
礼をやり続けている。その「世襲」の天皇
を、国家の中心の〈象徴〉と位置づけてい
る国家制度なんだから、天皇が参加する(特
に中央の位置にすわる)政治儀礼はみんな宗教
性(神話性)をおびてくるのはアタリマエな
んだよ。

日常的には天皇家の「私事」というベ
ールに隠している。その宗教性を公然化する
のは、政教分離の原則(憲法20条)を有する
憲法下では、まずいからね。でも、国有地(皇
居)につくった神殿で、日々くりひろげら

れている皇室神道の儀礼に「公」(国家)的
な性格がないなんて言えるわけがないんだ
よ、本当はさ。そしてこの間の天皇の「即
位」へ向かう「代替り」儀式。旧天皇(夫妻
の皇祖神アマテラスオホミカミを祀る伊勢
神宮参拝なんてのも含めて鏡を神体とする
神社でしょう、皇位の「みしるし」ってや
つ。これが出てきた。神話であり宗教その
ものでしょう。

日本の古いありがたい「伝統」と全マス
コミは強調しているけど、神話に基づく神
様の宗教儀式でしょう、国がバックアップ
している。ベールをはがすと「祭政一致国
家」のグロテスクな実態が現えてしまうの
で、〈伝統〉、〈伝統〉と繰り返しているけど、
一連の儀式は、すべて、宗教(神話)儀礼
以外のなものでもない。問題は「大嘗祭」
だけではないんです。神座の継承儀礼であ
るそれは、もちろん大問題だけど、ハッキ
リいえばXデーじかけの「違憲行為」のパ
レードがくりひろげられているわけですよ。
このニュースの読者にも、この「伝統」天

皇賛美一色の状況に、私同様、強い危機感
を感じている人が多いんだと思いますよ。
「代替り」の連続儀式は、宗教(神話)性が
全面露出せざるをえないわけです。例え
ばネ……。

——ハイ、ストップ。それとの関連で、共産党の「新
天皇即位の賀詞」をめぐる問題が、やはり、大き
く問題にされ出してますね。その態度変更の問題
が、志位和夫委員長のパフレット、「天皇の制度
と日本共産党の立場」も刊行されました。

天野 あれは前回批判的にふれた『しんぶ
ん赤旗』(6月14日)の長い長いインタビュー
がそのまます。それに、2018年3月
22日付の共産党中央委員会の「天皇の『代
替わり』にともなう儀式に関する申し入れ
(抜粋)」がプラスされているだけです。

その「申し入れ」は、こう書き出されて
います。

「日本共産党は、日本国憲法の全条項を
まもる立場から、天皇の『代替わり』にと
もなう一連の儀式にあたって、日本国憲
法の原則——とくに国民主権と政教分離の原
則を厳格にまもることが大切であると考え、
以下の提案を行います。／わが党の提案は、
天皇制反対の立場ではなく、憲法の原則に
ふさわしい行事にすべきという立場です」
(傍線引用者)。

——「天皇制反対」ではありませんというのは、「憲

法典の絶対化」・「一枚岩的解釈」でいきますということなわけですね。

天野 ウン、そういうふうを読むべきでしょうね。天皇制と敵対的原理といえない、民主主義や人権・平和主義と調和できるものと位置づけ対応していくという宣言だよな。

さつき言いかかったんだけど、代々木の本屋さんで、志位委員長のパンフのとなり、中島三千男さんの『天皇の代替わり儀式と憲法』（日本機関誌出版センター）も置かれていたので、まとめて買って読んでみました。中島さんは前の「代替り」の時には『天皇の代替わりと国民』（青木書店）という本も出している。僕もそうした本でおしえてもらっている「代替り」や国家神道研究の専門家という人。政府のいう「皇室の伝統」というものが支配者の都合にそって、大きく創りかえられ続けてきたこと、今、示されているものの大部分は「近代に新しく創られた伝統」なるものに過ぎないということ。こうしたことを具体的に知るためには、とつてもいいブックレットです。でもね、この人も、こう書いています。

「私は今の憲法の国民主権や政教分離原則にふさわしい儀式を、私たちが真剣に考えなければならぬと考えています。国民主権、政教分離、平和主義、基本的人権の

尊重などを体现した儀式・行事、憲法に規定されている国民主権下の象徴天皇制にふさわしい『代替り儀式』のあり方を考えるべきです」。

天皇のイニシアティブでなされた改革

——志位委員長が、いつているのも、そういうことですね。そんなことどうしたら……。

天野 いや中島さんも、戦前の「登極令」に依拠するスタイルで前回も行われてしまっているのに、「無理」ではという予想される声に、ここではこう答えています。

「まず、そもそも今回の代替り儀式ですら、この『生前退位』というのは『平成の代替わり』はもちろん明治以降の近代の歴史の中で、皇室典範そして登極令などで否定され想定されていなかったものです。まさに1817年の光格天皇から仁孝天皇の譲位以来、202年ぶりの大改革であり、破天荒な事です。しかもそれが国会での議論の中で実現したわけです。／また国会の関与、国民的議論はあまり行なわれませんでした。が、明仁天皇のイニシアティブにより明仁天皇、美智子皇后の葬儀は大きな改革がなされることが2013年に決まっています（11月14日宮内庁「今後の御陵及び御葬儀のありかたについて」）。：／このように『平成の代替り』はもちろん、近代の代替り儀式

の『伝統』を覆す200年ぶりであるとか、400年ぶりとかいう新しい大きな改革が次々に実現しようとしているのです。／残念なのはこれらの改革がいずれも国民の側というよりも天皇のイニシアティブによって先鞭がつけられたという点ですが、それでも今の時代は最終的に国民の多数の意思さえあれば『代替り儀式』の不可能と見える改革が可能な時代にあるということをしっかりと認識する必要があると思います」（傍線引用者）。

——なんか、「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が成立して「生前退位」したことがとてもいい事ってトーンだけど。国会で成立したっていったってかなりおかしいでしょう。この成立の時、天野さん、こうレポートしてますよね。

「この法案は国会では審議なしのフルスピードで可決。はじめから、そういう方向が公然と示されていた。与野党の協議がなされ、衆参両院の正副議長が『国会見解』をふまえて法案を策定するという（異例）のプロセスがつけられたのだ。『神聖な天皇陛下』についての法案に対立が公然化するのには許されない。そうした（挙国一致）が政治的に演出されなければならない、というわけだ。この（天皇タブー）が国会も、それをまったく批判的に問題にしなかったマスコミをも平然と支配している状況」（『翼賛国会での『立法改憲』』『反天皇制運動連絡会の月刊ニュース』2017年4月号）。

Netz、ちゃんと読んでいるでしょう。もともと、キチンと読んだのはピーブルズ・プラン研究所でつくられた『憲法解釈は朕のものアキヒト』というパンフレットに収められたそれだけだ。

天野 ハイ、ハイ。もう一点、中島さん「天皇イニシアティブ」を論じてるけど、天皇が政治メッセージをマスコミに勝手に発して、法律をつくらせちゃったわけでしょう。こんなこと、裏であれやこれや政治的に動いたヒロヒト天皇の代にだってなかったことでしょう。戦後憲法が絶対的に禁止していたことだから。そのパンフレットに収められた私の「天皇による『皇室典範改正発議権』の奪回」という文章で、こう書きました。

「今回の『天皇メッセージ』はアキヒト天皇による〈皇室典範改正発議〉であったことは、このメッセージにとつて、『法改正』に向けた動きが内閣主導でつくりられ、国会審議が開催されようとしている今の状況が、ハッキリと示している。それはヒロヒト天皇が失った皇室自立主義を支えた権利をアキヒト天皇が奪い返すという憲法制度の根幹をゆるがす政治行為である」。

こうした問題に、中島さん、まったくふれないのは、おかしいでしょう。

——ナルホド。結局、共産党も賛成にまわってしまった、この法律の内容については、「翼賛国会

での『立法改憲』の方では、こう論じましたね。

「だいたい、この『法』は、『天皇陛下のお気持ち』を『理解しこれに共感している』国民などと書き込んであり、『主権者国民』に天皇(制)の理解と共感を強制する『主権在民』『モクラシー原則を破壊する、とんでもないものである』」。

天野 そうですよ。法文に敬語をチリバメた。フザケタ法律でしょう。ついでに、もう一文。「反天連ニュース」の方の連載で、『反天連』のパンフ『A l e r t !!!『代替り』状況』の方に収められている「『皇位の安定継承』が前提!」も紹介します。あなたは読んでいただいていると思いますが。渡辺治さんも当時、この法案の審議をすこぶる肯定的に論じていた『朝日新聞』(2017年12月16日)発言です。その点を批判した文章です。

〈渡辺は、本気でこの『特別法』の国会議論をこんなふうに評価しているのです。あの天皇『特例法』翼賛国会を。この国会での政治討論を封じ込み(『退位問題を政争の具にしてはならない』というタテマエで)法案をとりまとめた衆議院議長大島理森は、決まっている結論に向かって、衆参正副議長の四名の会議から始まったプロセスを、それなりに正直に「『退位特例法』とりまとめは大変だった」(『文芸春秋』2017年8月号)で書いている。議長の根回しがすべて、国会

の『皇位継承』がなぜ、どうして必要なのか、という当然の論議をすべてタブーにした。挙国一致の賛成スタイルを演出した苦勞話である。「『皇位の安定的継承』は真剣に考えていくべき課題であるということとは、共通認識だったのです」／こんな『認識』の土俵にくぐられて、渡辺は本当によいのか。

天皇制に飲み込まれた共産党

——そうでしたね。中島さんの国会審議評価も同じネ。

天野 ウン。この「代替り」プロセスで天皇制がさらにドンドン強化されてしまっているのに。象徴天皇制は「民主化」されつつある、さらなる「民主化」を、といいつつ、その天皇制の枠内に共産党までのめりこんでいつてしまっている、そのことで天皇制は反対論をのみこみ、さらに強化されている。

残念だけど、そういう状況じゃないのか。

——とすると、「新天皇即位の賀詞」への共産党までの参加というのは、そういうこまった状況を象徴している、そんなふうに天野さんたちは考えているわけね。

天野 その通りです。この問題に関連して学者の横田耕一さんの「共産党・志位委員

1922年 綱領草案	天皇の政府の転覆と君主制の廃止
1945年 綱領	共産党の掲げる実践的要求は、天皇制の打倒、人民共和政府の樹立
1961年 綱領	天皇制の廃止、軍国主義の掃蕩。人民共和國をつくる
1994年 綱領	天皇制の廃止、軍国主義の掃蕩。君主制を廃止し、民主共和国をつくる
2004年 綱領	天皇の制度は憲法上の制度であり、その存廃は、将来、情勢が熟したときに、国民の総意によって解決されるべき



長の天皇論を読む」（『靖国・天皇制問題情報センター通信』No. 187号）の文章も紹介します。志位インタビューの、「天皇制度」について批判的認識はあるが、天皇制批判の運動をすることは一切しないという驚くべき主張を紹介した後、こんなふうに論じています。

「この結果、『かなり長期にわたって天皇の制度と共存する』が『共存する場合の原則としては、日本国憲法の条項と精神、とくに国政に関する機能を有しない』という規定を厳重にまもる、これが何よりも大切になるといえるのが、日本共産党の立場です。」とされる」。しかし、共産党は「元号」や国会開会式での天皇の「おことば」はじ

め「公的行為」をドンドン認めていつてしまっているのではないかと具体的に論じ、こう結んでいる。

「共産党が行なうとしている厳格な憲法解釈は、9条の場合にもそうであるが、本来の意味での厳格さを欠いており、『統一戦線』への目配り過重で、世論への迎合性がこのところ強い印象を持つのは誤りであろうか」。

マジな「厳格」解釈を目指す立場からのあたりまえの批判。かつて共産党もそれに近かったはず。

——まだ、ありそうだけど、オーバーするといけないからストップ。

天野 ウーン、原武史さんの「日本共産党と天照皇大神宮教」（『中央公論』2019年9月）の自前の「元号」で国家に対峙する天照教と共産党の姿勢も対比した、おもしろい論文も具体的に、紹介したかったんだけど。読んでみてね。

——ハイ、このところ、この「問答」に反響が大きいから、まだまだ続くからあわてなくてもダイジョーブですよ（笑）。

（あまの・やすかず／反天皇制運動連絡会）

前号の訂正とお詫び

175号に左記の誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

★天野恵一（象徴天皇教の祝祭ナショナリズム）批判—新天皇「即位」問題①

・17頁題字（誤）「新天皇「即位」問題①」↓（正）「新天皇「即位」問答①」／・17頁1段12行目（誤）「東京都神社本庁名にて」↓（正）「東京都神社庁名にて」／・18頁1段18～19行目（誤）「渡辺治さんは、『戦後政治の中の天皇制』」↓（正）「渡辺さんは、『戦後政治史の中の天皇制』」／・18頁2段2～3行目（誤）「宮城県議会の社会党議員の」↓（正）「宮城県議会の社会党議員の」／・18頁3段18行目（誤）「『日本も大国家とネオ・ナショナリズムの形成』」↓（正）「『日本の大國化とネオ・ナショナリズムの形成』」／・19頁1段24行目（誤）「共産党は当時も自立的な運動へ」↓（正）「共産党は当時も自生的な運動へ」

★荒井康裕「核の暦」・21頁1段2行目（誤）「ネバダ州の砂漠で」↓（正）「ニューメキシコ州の砂漠で」

★金光理恵「ねえママ、武器屋さんがこの街にくるの？／死の商人おことわり。武器見本市、NO!」・30頁28行目「MAST Asia 2017」↓（正）「MAST Asia 2019」

のら 紛争地で始める平和教育 運動場 ――ピースセル（平和の細胞）を広げる 運現

高遠 菜穂子

イラク第二の都市モスルが3年ぶりに「ISISイスラム国」から解放された時、私はこれまでにない脱力感を味わった。人道支援が次のフェーズに入ったが、どうしても力が湧いてこなかった。もうイラクで何もできないかもしれないとさえ思っていた。

あれから2年。私は今、とても楽しくイラクで過ごしている。半年前に運命的に出会った仔猫と暮らし始めたこともあるが、私を決定的に救ったのは、緊急支援と一緒に駆けずり回っていたクルド人の若者たちだった。

IS危機以降、イラク国内避難民は400万人を超えた（2017年ピーク時）。その半数近くを受け入れたのが北部クルド人自治区だった。中でも、クルド人自治区の最北、人口70万人のドホーク県は70万人の難民・避難民を受け入れた。モスルからのアラブ人、ISに襲撃されたキリスト教徒。ヤジディ教徒はほぼ全員がドホークに逃げてきて、ここは文字通り「民族宗教の

るつぽ」となった。また、ISからの奪還が成功した後も、復興が遅々として進まないことと、スリーパーセル（潜伏工作員）の不安もありモスル市民の帰還率は低い。車で1時間の距離なので、彼らは大学や職場に毎朝ドホークから通っている。

この状況で、前出の若者たちは「今ここで多様性を本物にしないと、またISのような動きが出てきて次の世代が襲われることになる。そうしないためにも私たちが動かなければいけない」と言った。意外だった。なぜならイラン・イラク戦争中の1988年に起きた「ハラブジャ事件」（注）はクルド人の記憶に深く刻まれているし、イラク戦争はクルド人にとっては「アラブからの解放」を意味し、親米が多かった。だから、クルド人の彼らの口から『ダイバーシティ』という言葉が出てきたのは驚きだった。

察するに、特に若い世代は、国際組

織やメディアと働く機会が増えアラブ人の戦争犠牲者を目の当たりにし、ヤジディ教徒からは「イスラム教徒」として罵られることさえあった。彼らはその経験を通して、国際感覚や人権意識を身につけることになったのだろうと思う。そんな彼らと話しながら、自分の心が再び水で満たされていくような感じがしていた。

2018年、「イラクに平和教育を！」



紙芝居に見入る子どもたち

という私の呼びかけに呼応したのは、実に多様な人たちだった。教師、司書、俳優、劇作家、デザイナー、起業家、難民支援ボランティア。イラク側は、緊急支援を一緒に奔走した地元NGO。

私は行政を巻き込むということにこだわった。なぜなら、以前ファールジャで「武力によらない対テロ」を目指し、地元の若者を雇用することで、過激派からのリクルートを防ぐ狙いのプロジェクトをやったのだが、グローバルなネットワークを持ち、潤沢な資金源を持つ国際テロ組織には個人では到底太刀打ちできなかった。本気で平和構築を目指すなら、行政も巻き込まなければならぬと思い知ったからだ。

ということで今回は、西ドホーク教育委員会、そしてIS少年兵たちも多数収監されているドホーク更生施設（少年院）とも協働していくことになった。こうして「紛争地で始める平和教育と環境保護」を目指す「ピースセル（平和の細胞）プロジェクト」が誕生した。プロジェクト名は、スリーパーセルが拡散する前に、私たちのピースセルを広げたいという思いでつけた。平和教育では、公立学校のカリキュラムに「図書」と「演劇」を組み込むことをゴールに据えている。これを「ドホークモデル」として確立し、広げていくという30年計画だ。

まず取り組み始めたのは、読書キャンペーン。子ども時代の読み聞かせや読書は、言葉を学び、表現力を身につけ、想像力、創造力、共感力、思考力を身につける。これらの力を身につけなければ、平和を創り出す対話などできない。お互いに自分たちの被害をおつけ合うだけになる。しかし、ここには想像以上に読書習慣がない。小学校に図書室がない。公立図書館の児童図書は3階に追いやられている。本屋そのものが少ない上に、絵本や児童図書は奥の方で床に無造作に積まれている始末。これはドホークだけなのか？ と思いきや、アラブ人もほとんどが「読書したことがない」と答える。読み聞かせに至っては、「何それ？」という感じであった。日本では、0歳児にも本を読んでやるし、妊婦が胎児に読み聞かせることだってあると言うと、人々は目を見開いて驚く。「いないいないばあ」（童心社）の帯にある「640万部突破」を見せると、「ひゃー！」と、仰天と落胆が入り交じったような声を出す。

コンテンツも悲惨なレベルだ。アラビア語は定番物語の翻訳物が結構ある。クルド語は悲しいくらいにない。しかも、ドホーク方言（バディーニ）になると本屋を駆けずり回ってやっと4冊見つけただけ。アルビル・スレマニ方言（ソラニ）で書かれた絵

本は量的にはまだマシだったが、ドホークの子どもたちはソラニを読めないことが発覚！ リサーチしていくと、大人もお互いの方言が理解できないので、アラビア語で話しているということもわかってきた！

なんということだ！

本屋で紹介されるもの、幼稚園で読まれているものはどれも「しつけ本」。早寝早起き、歯を磨け、手を洗え、身なりを整えろ。そうしない子はお母さん嫌いですというパターン。どれも大人目線で、物語ではない。土地柄、「地雷に気をつけよう」という本はたくさんあるが、最後のページに「これらを埋めたのはアラブ人です」と書いてあるものもあるので要注意だ。

ともかく、読み聞かせを定着させるため、ボランティアを募集し、小学校、病院、難民キャンプ、公園などで読み聞かせを始めた。読み聞かせイベントには親子100名が参加して大盛況だった。中でも日本の紙芝居は大人にも子どもにも大人気。教育委員会の教育長が自ら「クルド民話」を見様見まねで紙芝居にしてきたくらいだ。ストーリーが絵の裏に書かれてあって、紙芝居ができないという面白エピソードもあったが、その心意気が嬉しいではないか。

読み聞かせボランティアたちの反応も実に面白かった。「この本は長いので省略し

ていいか?」「これは子どもたちには理解できないから読むべきではない」。最初はその発想に驚いたが、大人も読み聞かせの体験がないのだから仕方ないのかもしれない。「絵本作家の紡ぎ出した言葉を大切にしましょう。理解できなくてもいいのです、読み聞かせは新しい言葉を覚えるためでもあるのです」と一つ一つ丁寧に答えるようにしている。絵を指差しながら、文章を読むのではなく説明をしてしまう人もとても



多い。「これでは子どもたちの想像を邪魔してしまいます、みんなが同じ絵を見ていなくてもいいのです」と答えるのだが、なかなか理解してもらえない。考えてみれば、幼稚園から大学まで、一貫して詰め込み教育で、同じ意見を誘導されるのが当たり前になっている。先生たちもそうした教育を受けているのだから、誘導するのが当たり前になるのだと理解できた。

前途多難ではあるけれど、毎週読み聞かせを楽しみに集まってくる子どもたちほとんど増えているし、お母さんたちからの問い合わせも来るようになった。新しいことを開拓しているという実感がすごい。このワクワク感を日本の皆さんにもおすそ分けしたい。

そして、読書と並行して行ないたいのが、演劇を使ったコミュニケーションワークショップだ。以前、講演で訪れた福島県内の高校で、原発事故をテーマにした演劇を観た。原発事故で被災し避難を余儀なくされた生徒たちが、東電社員や経産省、帰還困難区域の役場の人たちへの取材を何度も重ね、自分たちで脚本を作り、自分たちで演じる。しかも、これは部活ではなく授業だった。衝撃と感動で涙が出た。視点を変える、異なる立場の人を理解する手段として、演劇の可

能性を強く感じた。これをイラクでやりたいのだ!

実は、来週から演劇人3名がドホークにやってくる。全員が日本全国の小学校でワークショップをやっている人たちだ。演劇チームのカウンターパートはドホーク大学芸術学部演劇学科。イラクの状況に合ったメソッドを共同開発していく計画だ。

来年は、地方へ出向いて読み聞かせをする移動図書館、大学での環境教育も始めたいと思っている。夢が膨らんでにやけてくる。教育支援は緊急支援やインフラ整備と違って結果がすぐに見えない。でも、私は30年かかっても見たい世界がある。紛争地から始める平和教育で世界を平和にしたいのだ。

(たかとお・なほこ/イラク人道支援ワーカー、写真提供:筆者)

注:「イランに協力した」としてイラク軍から毒ガス攻撃を受け、5000人が虐殺されたと言われている。



のら 危ない、うるさい、

都心低空飛行はNO!

運動か
現場

増間 碌郎

8月8日、国土交通省は2020年東京五輪に向けた羽田空港の「機能強化」として来年3月29日以降、都心部を低空飛行するコースの運用を開始すると発表しました。これは、これまで安倍首相、石井国交大臣自らが国会において「本計画は地元の理解を得て進める」とした答弁をも踏みにじるもので、断じて容認できません。強く抗議します。

以下、本計画の概要、計画の問題点、「みなとの空を守る会」の活動と今後の運動について述べます。

本計画の概要

国土交通省は国際競争の強化、訪日外国人旅行者の増加、国内各地への経済効果の波及等をあげ、2020年の東京五輪開催までに成田、羽田を合わせて今の75万回から100万回に拡大する。そのために羽田空港の現在ルートである「海から入って海に向かって出る」から、新たに都心を低空で飛行する2つのルートを策定。南風時、午後3時から7時の間、2つのルートを合

わせて1時間に44便を飛行させる計画です。

これは、実に1分半から2分に1機、山手線のラッシュ時並みの飛行となります。飛行高度は渋谷、麻布、恵比寿付近で約700m、品川駅で450m、大井町駅では330m。都心上空をスカイツリー、場所によっては東京タワーよりも低い高度で飛行。過密都市東京のど真ん中を低空で飛行させる非常識な計画と言わなければなりません。

計画の問題点

飛行ルートの設定自体が危険な計画です。過密都市の上空を飛ばすことによって、騒音や落下物、さらには墜落の危険など市民生活への深刻な影響が指摘されます。

長時間にわたるジェット機騒音によって、精神的ストレスの増大、学力や作業能力の低下、乳幼児の成長ホルモンへの影響、脳溢血や心疾患などのリスクの増加も懸念されています。また、社会的弱者、とりわけ、音が頼りの視覚障害者にとって飛行機

騒音は生命にかかわる危険要素とさえなります。

また、飛行機からの落下物の事故は頻繁に起きています。2017年9月には、KLMオランダ航空機から重さ4.3kgのパネルが大阪市内に落下し、車両を破損。2018年5月には、熊本空港を離陸した日航機のエンジンが破損し金属片が落下、病院の窓ガラスを破損。このような事故が都心で起きたら人的にも物的にも甚大な被害が考えられます。落下物は、国交省の説明でも、2017年11月から2018年10月まで全国で447件が報告されました。しかしこの数字には氷の落下は含まれていません。氷は着陸態勢に入り車輪を出す際に落下します。新ルートでは、新宿から渋谷、港、目黒、品川にかけて車輪を出すときに、氷が落下することが容易に想定されます。落下物事故を無くすためには、都心ルートではなく海上ルートが事故をなくす最良の策と言えるでしょう。

米軍横田基地が首都圏上空の管制権を管理する横田空域は独立国としてあるまじき事態で空域の返還、民間航空への開放は増便問題を考える上でも重要です。

みなとの空を守る会の運動

みなとの空を守る会は2016年5月に



発足しました。主に港区を中心に活動を行なっています。この間、ルート下のスーパーや駅頭などでの宣伝・署名を行ない、あわせて港区議会への請願署名にも取り組んできました。また広く住民にこの問題を知らせる目的で5回にわたるパレードを実施してきました。パレードには立憲民主党、日本共産党、社民党の国会議員や区議会議員も参加しています。会はこの問題でいち早く立ち上がった白金・高輪地域の町会をはじめ多くの町会、高層マンションの管理組合などにも働きかけ、請願署名、パレード、地域懇談会など共同のとりくみも行なってきました。港区議会にはこれまでに町会との共同で3回にわたって請願書を提出して

きました。請願はいずれも「継続審査」扱いとなっています。自民党と公明党、都民ファースト・維新は趣旨はよく理解できると言いながらもあれやこれやと採択を回避しています。とりわけ、今年の3月には品川・渋谷区議会において全会一致で「計画の見直し」や「容認できない」とする内容で決議や意見書を採択していることから、港区議会でも実現に向けた働きかけを行なっています。

2018年秋に会の先駆的な取り組みとして、「航路下住民アンケート」を実施しました。青山、麻布、白金、白金台、高輪、港南、三田の地域約3800世帯に2カ月にわたり、のべ250人でアンケート配布を行ないました。回答は約1400名の方から寄せられ、85%が計画反対・中止を求め、60%が計画の内容をよく知らなかったということが明らかにになりました。アンケート結果は、多くのマスコミの参加のもと記者会見で発表し、大きく報道されました。

アンケートの内容は、国会質問の中にも取り上げられています。会は結果を国交大臣、港区長、全区議に渡し「住民の意見を真摯に受け止めてほしい」と要望しました。このようにアンケートは大きな反響を呼び、世論を盛り上げる上で大きな役割を果たせたと考えています。

今後の運動

国交省はこうした実態を知りながら、強引に「スケジュールありき」で計画を強行しようとしています。しかし、前述のように住民の「理解」も「合意」も得られてはいません。来年3月末の計画強行を許さないためにも、住民の声と運動をさらに大きくものにし計画の撤回に向け全力をあげたいと考えています。

8月30日から、小型機を使つての検査飛行が毎日実施されています。未だ計画を知らない方や関心の低い方がまだまだおられます。引き続きより多くの方に関心を持ってもらうための努力が求められています。小池都知事は9月議会の所信表明で「羽田新ルートの実現に向け積極的に協力する」と述べています。航路下住民のほとんどが反対している住民の声をきちんと聞けと迫りましょう。

私たちは、引き続き町会やマンション自治会との共同行動を継続し、さらに党派を超えての区、都、国会議員と住民運動とが議会内外で協働を強め、計画の撤回を含む見直しを大きく迫っていきたいと考えています。

(ますま・ろくろ／みなとの空を守る会共同代表)

重度障害者議員誕生に拍手！

太田 修平

れいわ旋風

この夏の参院選では、障害者代表といわれる候補が4人当選した。れいわ新選組の比例代表特定枠から立候補した船後靖彦氏、同じく木村英子氏、立憲民主党比例代表の川田龍平氏、野党統一候補として岩手選挙区から出た横沢高德氏である。川田龍平氏は3期目をむかえ、これまでもいろいろと障害者政策で活躍してきた。今回新しく当選した船後氏はALSという難病で、自身で言葉を発することが難しい。木村氏は電動車椅子を使っているが、常時介助が必要。この2名は障害者運動の世界でも障害が重い人たちで、彼らが国会に送り込まれた意義は、様々な意味において大きい。実は障害者代表の候補は他にもいた。斉藤りえ氏で聴覚に障害をもっている。『筆談ホステス』という著書で有名になった。国会中継が手話や字幕を付けていない中、聴覚障害の当事者の議員の誕生は望まれるところでもあったが、惜しくも当選には届かなかった。

それにしても山本太郎代表率いる「れいわ旋風」は想像以上のものだった。安倍一強体制に対する市民の不満、それに対抗すべき野党、とりわけ立憲民主党や国民民主党の不甲斐なさへの不満を見事に取り込んでいった。選挙戦のさなか用事で立川に行った時、山本太郎氏が演説に来ていて凄人ばかりであった。エレベーターで一緒になった女性が連れの人に「山本太郎が来ているみたい」と話しかけていたのだが、普通の市民から「山本太郎」という名前が出てきたのにはビックリさせられた。

《私たち抜きで私たちのことを決めてはならない！》

山本太郎氏は反原発運動など市民運動との連帯を重視する人である。障害者の集会にもよく連帯挨拶に来ていた。昨年10月の「骨格提言の完全実現をめざす大フォーラム」でも当時の自由党を代表して挨拶した。その中で彼は「《私たち抜きで私たちのことを決めてはならない》を主張するのであれば、皆さんの中から代表を国会に送

るべきではないのか！ 障害者は多くいるのに、国会内には少ない。当事者をもっと送り込むべきである」と力説していた。彼は言った通りのことをやってのけた。政治家がリップサービスでこういう話をすることは珍しくないが、昨年自民党の都合で改正された参議院の比例代表制度を逆手に取り、2名の重度障害者を特定枠候補者にしたのだった。山本氏自身は惜しくも当選には届かなかったが、自らのことよりも、私たちに對して言ったことを実現させたのである。彼の政策は措いておくとして、有言実行の姿勢は高く評価できる。

過去において障害者運動から国会議員を送り出したことに成功したこともあった。1989年に当時の社会党から比例代表に立候補した堀利和氏である。当時の比例代表は、政党名で投票する形式をとり、政党が候補者の順位を決め、上位の人から当選していくというものであった。その時堀氏は、中位の上の方に順位指定をされていた。厳しいと思われていたが、土井たか子氏のマドンナ旋風によって社会党が予想以上に当選者を出し、堀氏は当選した。2000年代に入ると、比例代表の方式が変わり個人名を記載することとなり、何人かの仲間が挑戦したが、大きな組織を持っていない障害者候補は苦戦することとなる。そうこ

うしているうちに私たち障害者団体も候補者を出すことをあきらめていくのであった。昨年やり方が変わったことは、私もつい最近まで知らなかった。

バリアフリーや介助の問題

選挙が終わり、先日国会が開かれ、重度障害の2名も登院した。船後氏と木村氏は車椅子のサイズも大きく、本会議場の椅子を3席分取り払い、スペースをつくった。船後氏はパソコンを使わなければならず、その電源を設置したりするバリアフリーの工事を行った。また採決の際の投票にあたっては、介助者が代わりに行くことや、介助者の挙手による採決も認められた。それ自体、国会の価値観を揺さぶる大きな出来事である。

二人は重度障害をもつため、常に介助者が必要となるが、それをどこが行なうかが今焦点となっている。二人とも障害者施策の重度訪問介護サービスを使っているが、通勤などの経済活動に対してはそのサービスを使えないことになっている。参議院は、当面参議院で保障するとしたが、厚生労働省に対しては、通勤などにも重度訪問介護サービスを使えるように制度改正の検討をするように求めた。二人は「自分たちだけが特別扱いされるのではなく、重度障害者の就労を促す意味でも、重度訪問介護によるサービスが基本だ」と主

張している。

障害の重い人が国会という立法府で仕事をしていくには、このサービスが通勤や就労にも認められるようになることがとても重要である。

広い視点にたつて

私は木村氏とは30〜40年前に知り合った。仲間の一人暮らしを支えていこうとする心優しい人で、行政交渉では相手をやりこめる頼もしい存在だ。ただ「介助」「介護」問題をこれまでずっと取り組んできて、他の分野では未知数の部分もある。毎年秋に行なわれていた「大フォーラム」には参加していたが、日常的には他の障害者団体と深い交流があったわけではない。これから私たち障害者運動としても理解と交流を求めていき、広範な問題で共闘関係がつくれたらと思う。

ところで「れいわ新選組」は、基本的には消費税廃止を訴えている。現状を考えると、10月からの消費税増税については、私も首をかしげざるを得ないが、一方でヨーロッパ特にスウェーデンやデンマークなどの福祉水準が高い国々は、間接税率（消費税率）も高い。そういう状況を「れいわ新選組」はどう捉えているのか、率直に聞いてみたい。

また、日本を取り巻く国際関係が厳しさを増していく中、憲法9条を守る立場なのかどうか、その立場性も明らかにしてほしい。日本は軍事力による紛争解決を目指さないことを憲法で明言した、世界でも数少ない国である。つまり「力」ではなく、話し合いで解決していくことを基本理念としているはずなのだ。そういう問題についても、「れいわ新選組」は、平和を求め、他の国との対話を求める市民の立場にたった活動をしてほしい。

（おおた・しゅうへい／障害連参与）



庭を切り取り「リニア」が通る

田中 洋一

静かに暮らしてきたマイホームの目の前に、高さ30m近い建物が建つとしたら、誰もが驚くに違いない。甲府盆地の南西部にある山梨県南アルプス市に、こんな事態に納得がいかず異議を申し立てた住民がいる。事業者のＪＲ東海に工事差止めを求める裁判が甲府地裁で始まった。

「建物」はリニア中央新幹線の高架橋。品川から名古屋へと続く285.6kmは、南アルプス市を横切って赤石山脈（南アルプス）の懷をぶち抜く。全体の86%がトンネルで、掘り出した大量の残土を処理するめどが今も立っていない。一方、残る14%は地上を通り、日照・騒音・振動そして移転の問題がつきまとう。

まだ新しい20～30戸が立ち並ぶ住宅街に案内された。団地内の道路をよく見ると、斜めに横切る方向に鉦が打ち付けてある。黄色い鉦がリニア用地（約22m幅）の両端を示し、その真ん中に赤い鉦が打ってある。

これが高架橋の建設予定地だ。

鉦の先に秋山美紀さん（47）さんの自宅がある。236平米の敷地に延べ床面積101平米の二階家が建つ。リニアは敷地の南東を三角形に切り取り、家の軒先から2mしか離れていない。

秋山さんは初めて参加した事業説明会で、ＪＲ東海の担当者から「用地がかかるので売って下さい」と持ちかけられた。てっきり敷地全体を買い取るものと思っていた。だが、買い取るのは22m幅の用地がかかる所で、他には日陰の補償があるだけと分かった。

そうだとすると、移転は出来ない。高架橋は敷地内に食い込んできて、居宅のわずか2mの所まで迫ってくる。しかも、敷地の南には高架橋の橋脚が立ち、日陰に追い打ちを掛ける。

まず日当たりが気になった。高架橋に加えて橋脚が立ち上がると、冬はほとんど日が当たらなくなる。日陰への補償はあるが、大切な日照には換えられない。工事中もさることながら、開業後は1時間に10本程度

の列車が行き来し、騒音や振動が心配だ。夜勤で働いている夫が昼間ちゃんと休めるだろうか。電磁波も気がかりだ。

「国の事業だから、文句を言っても仕方がない」。半ばあきらめていた秋山さん夫婦だが、山梨県東部で走行試験をしている山梨実験線を今年6月に見に行つて、絶句した。「高架橋の周りはすごい圧迫感で、恐怖感さえあった。とても住めない」

秋山さん夫婦は2007年、美紀さんの生家に近いこの地に家を建て、アパートから引越した。その頃から転入する隣人が増えた。

補償問題もそうだが、秋山さんはＪＲの交渉の進め方に不信感を抱く。だから、ＪＲから境界線の立会いを求められても応じないし、認める印鑑も押していない。

ＪＲに疑問を持つ南アルプス市リニア対策協議会はＪＲ東海を相手に民事調停を昨年起こしたが、不調に終わった。代表の志村一郎さん（77）から提訴の呼びかけがあり、秋山さんも集会に出た。あきらめていたら何も解決しない、と原告に加わった。

南アルプス市の一帯は水田と果樹園が目立つ。河西正廣さん（71）はトマトのハウス園芸を手掛けている。52歳で農協職員を脱サラし、現在は2000平米と700平米のハウス2区画を持つ。このう

ち20000平米の方は地下に養液の配管が走る養液栽培なので、一部だけを切り取ることは出来ない。ところが、リニアは肝心のハウスのど真ん中を斜めに横切り、6割以上の面積が切り取られる。JRが買い上げを公式に認めているのは切り取る分だけだ。その両側、つまり北西と南東には三角形の農地が残るが、地下の配管が分断されるので、「ここでトマトを作るのはもう無理だ」と河西さんはあきらめている。

リニアの話を初めて聞いた頃はまだ60代。「新しい場所でやり直すか」とも考えたが、これからは体力的にだんだん厳しくなる。

「リニアが通ることにノーではないが、公共事業なんだから住民が被る不利益を解消すべきだ」と力を込める。たとえば、用地の北側30mは日陰になるのでJRが取得するよう譲歩案を示したが、無視されたそうだ。

日照は農家に共通する死活問題だ。「今年の長梅雨で巨峰やピオーネの色つきが悪い。そんなブドウ農家の声も代弁して欲しい、と頼まれている」と河西さんは言う。「ここもモグラ（トンネル）で行けよ。それなら農家は反発しない」

原告は志村さんや秋山さん、河西さんたち南アルプス市の8人。リニアにより被る

不利益は様々だ。ゴム印製造販売の西川勉さん（70）の約1300平米の水田は南東の角を切り取られる。

切り取られるのは約160平米だが、残る田も高架橋の日陰になるので水稻の生育は悪くなるだろう。さらに、田植えや稲刈りは機械力に頼るので、「形が悪くなった田んぼは使いにくい」。

農地だが、宅地に転売できる望みもある。「持つていけば、いつか足しになる」。それだけに、リニアで資産価値が下がってしまうことを西川さんは心配している。

×

×

志村一郎さんが民事調停を申し立てたのは、不明確で不誠実なJR東海の対応に腹を据えかねたからだ。調停の申し立ては移転補償や残地買取りという金銭問題が主だった。

今年5月の提訴では、JR東海を相手取り、原告8人が絡む約5kmの区間の工事差止めを求め、原告1人あたり慰謝料100万円を請求している。リニア工事の差止めが主眼になった。

実は、リニア工事の実施計画を認可した国土交通相を被告に、認可の取り消しを求める行政訴訟が2016年5月に起こさ

れ、東京地裁で係争中だ。工事区間全域の805人が大原告団を作っている。

一方、南アルプス市の訴訟はなぜ事業者を被告に据えたのか。7月30日に甲府地裁で初口頭弁論が行なわれ、その報告集会で代理人の梶山正三弁護士はこう説明した。

「国相手の行政訴訟は基本的に最高裁まで行き、（決着に）10年かかる。途中で工事はやめさせられない」。その上で、南アルプス市の訴訟について「公共事業を民事訴訟で問うのは普通は厳しいが、本件は環境破壊や住民の生活権侵害があまりにひどい。だからビッグプロジェクトだが、民事訴訟で勝てる可能性がある」。

梶山さんは初弁論で原告8人それぞれのリニア建設予定地を検証するよう裁判官に求めた。

「財産権と人格権の侵害は、見ればよく分かります」

2019年8月3日

（たなか・よういち／ジャーナリスト）

*「歩く見る聞く50」より転載させていただきました。

監督・脚本／ロベルト・ロッセリーニ 原作・脚本／セル
ジオ・アミディ 脚本・助監督／フェデリコ・フェリーニ
撮影／ウバルド・アラータ 音楽／レンツォ・ロッセリ
ニ 出演／アルド・ファブリツィ アナ・マニャーニ
マルチェッロ・パリエロ マリア・ミキほか
イタリア語／ドイツ語 103分 カンヌ国際映画祭特
別賞、ニューヨーク批評家外国語映画賞受賞（いずれも
1946年）DVD発売元・株式会社アイ・ヴィー・シー



アンナ・マニャーニの疾走 ——「無防備都市」を回顧する

写真協力：公益財団法人川喜多記念映画文化財団

●ロベルト・ロッセリーニの名作「無防備都市」が日本で初上映されたのは1950年秋、半年前に始まった朝鮮戦争が熾烈の度を加えていた頃だった。既にロッセリーニの第2作「戦火のかた」デ・シーカの「自転車泥棒」靴みがき、ルイジ・ザンバの「平和に生きる」等イタリア・ネオレアリズモの代表作の多くは公開されており、海外で評判の高い本作だけがGHQの公開許可がすぐには下りなかったのは何故か。いま推測するに、ナチス・ドイツ占領軍への民衆の抵抗をリアルに描いたこの作品を、不穏な空気に満ちた日本で公開することにGHQとしては躊躇したのではないか。何しろ、のっけから飢えたローマ市民がパン屋を襲う場面が出て来る作品なのだから。

●パン屋襲撃の群衆の中から現れるのが逞しい寡婦ピーナ（アンナ・マニャーニ）。7歳の息子に怒鳴り散らす時も、神父に愚痴をこぼす時も、圧倒的な存在感を示す。彼女の恋人フランチェスコは、レジスタンスの幹部の一人。ふたりは住宅難のため狭いアパートで、妹や親戚と同居して暮らしていたが、ようやく結婚にこぎつけ、パーティが開かれることになっていたその朝、アパートは突然完全武装のドイツ軍に包囲される。捕らえられ連行される彼を追って、ピーナが射殺される場面の迫力は、映画史に特記さ

れるものになった。オットー・プレミンジャーは「映画の歴史は二分される。『無防備都市』以前と以後だ」と語ったといわれる。

●映画の後半では、国民解放委幹部の闘士マンフレディ（マルチェッロ・パリエロ）とレジスタンスに協力するピエトロ神父（アルド・ファブリツィ）が共に捕えられ、情報提供を拒否したマンフレディが拷問にかけられるが、彼は最後まで口を割らない。（拷問の数場面は、日本公開版ではカットされた）。彼の死を見届け、ナチスを「悪魔」と罵った神父は、公開銃殺となる。その日、広場には神父の教えを受けた子供たちが集まって処刑を見守る中、神父は付き添いの僧侶に言う。「立派に死ぬのは難しいことではない。難しいのは立派に生きることだ」。全てが終り、子供たちはローマを望む坂道を肩を寄せながら帰って行く。その表情は見えず、背中だけが全てを物語る。

●この映画には、一片の感傷主義もみられない。つい数カ月前に現実だった出来事を再生しているのだ。敗戦を境に手のひらを返すような行動を取った大人たちとうんざりしていた16歳の私にとって、この映画の登場人物はひたすら眩しかった。以来69年、私は15回以上この映画を見、その度に感動する自分を見出した。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）

わたしの妻は洗濯が好きなのだが、体調がすぐれないときには、洗いはするものの、洗濯物を棚やら引き出しやらに戻せなくなる。分類をして、もともとあった場所に戻すのは、そうしたやすい行為ではないのかもしれない。生態心理学者の佐々木正人さんから「人生は片付けだ」と聞いたことがある。幼児のふるまいを観察しつづけた佐々木さんの感想だ。幼児がおもちゃを引っぱり出し、やがて一日の終わりにその玩具を、母親や保育士にうながされ、あるいは手伝いを借りてもとの場所に戻す。幼児の毎日はこの繰り返しだ。

佐々木さんは、「人生は片付けだ」は大人も同じだと語る。大工

など職人の仕事を見てもそうだ。クルマに積んだ道具や材料を持ってきて、仕事が始まれば片付けて帰っていく。デスクワークでは、朝に書類や筆記具を取りだし、終業時間に片付ける。いまは、それらをコンピュータのなかでやっているのだ。

妻が不調のとき、山のようになった洗濯物を片付けるばあいがある。やがて不思議な事態に気づく。両足ぶんでセットのはずの靴下がそろわない。それも、1足や2足ではなく、20足ほどが片足しかない。はっ

連載エッセイ第73回

きりした柄の靴下もあり、見まちがうはずはないのに、いったい家のどこに隠れてしまったのだろう。そう考えると、身の回りにははぐれてしまった物が多い。上下の揃わないパジャマ、片割れが行方不明の箸、キャップの無くなったボールペン……。

南某市が出す広報誌の話を、アイデア段階でもちかけてきたこともある。わたしがブックデザインの講義をしに那覇へ行ったのも、和多田さんが沖縄でなんらかの仕事をしようとしていたのだろう。もともと出版人は、時代を読みながら書き手とテーマを組みあわせる工作者である。彼らの目には、多くののはぐれたことがらが見えていた。人物や問題を結びつけながら、社会を片付けていた気がする。いつけん片付いているかのような社会に「はぐれているもの」を

身近な工作者

鈴木一誌

探す力が彼らにはあった。ベ平連の運動もそうした工作者によって創出された。

いの意味だろうか。谷川雁の著書『工作者宣言』を思いだすひともあるだろう。工作者と呼ぶにふさわしい人物が減った、と感じる。3年前に晩聲社の元社長・和多田進さん、そして今年、太田出版の元社長・高瀬幸途さんが亡くなったせいもある。ふたりともが工作者だった。

ふたりの工作者からは、ブックデザインの仕事ばかりではなく、さまざまな運動や企画の声がかかった。たとえば和多田さんが、香港のテレビ局を紹介する印刷物や湘

にラベルを貼って、関連資料やメモをためていき、仕事の完了とともに袋は倉庫へ収納する。和多田さんと高瀬さんから依頼され、行き場のないままになった封筒が数多くある。残された袋を見ながら、ふたりが結びつけようとしていたことがらがなかったのかを想像する。

(すずき・ひとし／ブック・デザイナー、題字デザインも筆者)

天野恵一・鵜飼哲編

Why don't you stop
the Olympics?

AKISHINO

で、
オリンピック
やめませんか？『で、オリンピックやめま
せんか？』

天野恵一・鵜飼哲編

(2019年、亜紀書房、1728円)

すでに東京オリンピック開会まで1年を切った。竹田元JOC会長は、招致の際に2億3千万円という賄賂を使ったという疑惑が晴れないまま、辞任に追い込まれた。本来なら大規模な疑獄事件に発展する事件だと思う。他にもオリンピック・パラリンピックをめぐる様々な問題は山ほどあるにもかかわらず、メディアを中心に東京五輪賛成報道ばかりが溢れかえっている。なぜなのか。

本書は、私の所属するオリンピック災害おことわり連絡会が2017年2月から開始した「おことわり連続講座」の記録を中心にとまとめたものである。

とにかく東京オリンピック・パラリンピッ

クをめぐる問題群は多様で幅広い。現代の社会問題をほとんど網羅していると言っても過言ではない。私は以前より東京オリンピック・パラリンピックは災害の「デパート」だと形容してきた。

まずは本書の最後に掲載している「2020東京オリンピックに反対する18の理由」から読むことをお勧めする。この項は単独のガイドブックとして作られているが、コンパクトに反オリンピックの理由を18ポイントに凝縮していて、読みやすくできている。そのガイドブックの内容をさらにまとめて掲載しているので、本書の各項を読み進める上での羅針盤となるだろう。

講座は、世界のオリンピック批判からスタートする。リオ五輪と平昌五輪に反対する人たちからのオリンピック批判の論理にまずは耳を傾けたい。世界的に見れば、反オリンピックの運動は日本においては考えられないほど多くの、そして多様な市民によって実践されてきている。私たちも世界的スパンで反オリンピックを考えるべきだ。

日本における市民追い出しは新国立競技場建設を中心とした神宮再開発に見られる。2017年5月に実際に現地のフィールドワークを行ない、それに関する講演を収録している。2017年7月には「パラリンピックがもたらすもの」と題して障害者スポーツ

における更なる能力主義をいかに批判するかを論じている。パラリンピックの問題を考えるには必読のパートだ。

2017年10月9日(「体育の日」)には近代スポーツとオリンピックを考える講座を行ない、オリンピックというイベントばかりでなく近代スポーツの持っている勝利至上主義、効率優先主義などを組上に載せて議論すべきことが語られている。特にアスリートによる反オリンピックの論理は刺激的で、様々な場面で展開されるべきだ。

2017年12月にはナショナルイベントとしての東京五輪、特に天皇代替わりで出てきているナショナルリズムとオリンピックを関連付けながら議論されている点に注目してほしい。講座の最後は2017年3月に行なった「復興五輪」の欺瞞性を撃つ原発とオリンピックを考えるものだ。

連続講座終了後も再度市民のためのスポーツをテーマにした学習会、そしてそれまでで欠けていたスポーツとジェンダーを考える学習会の内容を収録している。

反オリンピックを疎遠なものと感じていた人にも本書を読むことでそのスタンスを変えさせるだけの力を本書は持っているとは私に考えている。

宮崎俊郎(みやざき・としお)「2020オリンピック災害」おことわり連絡会

戦争の記憶

コロンビア大学特別講義—学生との対話—
キャロル・グラック

なぜ世界は戦争の
歴史でいがみ合うのか
真実の歴史は
存在するのか

日本近現代史の権威・
米コロンビア大教授が
各国の学生との対話を通じて
「歴史」と「記憶」の意味を探っていく。
「ニュースウィーク日本版」で
大反響を呼んだ特別授業、
待望の書籍化

講談社現代新書

戦争の記憶 コロンビア大学特別講義

キャロル・グラック著

(2019年、講談社現代新書、840円＋税)

本書はコロンビア大学でのキャロル・グラック教授と学生たちとの対話で構成されている。学生達はアジアに関心を持っている様々な国の出身者だ。彼らは「戦争の記憶」を手がかりに歴史を考察する。講義は教授が問題提起をして、学生たちが考えるというやり方で進められていく。

考察の本論は「慰安婦問題」である。それが表面化するまで、なぜ長い時間を必要としたのか、どうやって人々の記憶に慰安婦問題が戦争犯罪として認識されていたのか。とても重要な視点だ。教授はこう説明する。「戦時中の女性に対する暴力はどの国にもあって、しかも日本では売春施設が日常の延長にあり、戦地においても慰安

所が当然のように存在していたから慰安婦問題が表面化しなかったのだ」と。

「慰安婦」の記憶に変化を起こしたのは1990年代のフェミニズムの台頭にある。韓国では1980年代の民主化闘争を経て植民地支配という観点から慰安婦問題の活動が始まった。一方、アメリカでは1990年代に韓国系アメリカ人、中国系アメリカ人が声をあげ始める。日本で慰安婦問題が語られだしたのは、1991年3人の元慰安婦が日本政府を相手に起こした訴訟からである。

1993年には政界に変化が起き河野談話が発表される(この年、戦後ずっと政権を保持していた自民党が下野する)。政治が変わると過去の記憶への対処の仕方も変わっていく。その後1995年に補償を目的とした基金が設立され、歴史教科書にも慰安婦のことが記述されるようになった。しかし自民党が再び政権に復帰してから歯車が逆回転を始める。特に安倍政権では「慰安婦像」をプロパガンダとみなし、この設置を排除することに必死になる。

教授は言う。「同じようなことがホロコーストでも見られた。しかし日本政府が抗議をすればするほど慰安婦像は世界各地に設置されるだろう。否定すればするほど記憶に刻まれるのが道理である」

この問題はメディアを通して拡散され、アメリカ、オランダ、EU議会、イギリスなどから「日本政府は過去に向き合うべし」という決議が出される。

一方ユーゴスラビア紛争での組織的レイプが問題になり、1998年、国際刑事裁判所(ICC)は戦時中の性暴力を「人道に対する罪」と規定した。戦争にはレイプがつきものだ多くの女性が諦めていた。しかしそれが初めて国際法上「犯罪」として認定されたのだ。こうした動きに元慰安婦たちの活動は無縁ではない。今や彼女たちは女性への暴力を否定・告発する象徴として存在する。

この夏、「あいちトリエンナーレ」で平和の少女像(慰安婦像)の展示が中止に追い込まれた。世界の流れに逆行する政権とそれに連なる保守勢力が今のままであっていいはずはない。この本は、歴史に対して共通の記憶とともに持つことの重要性を示している。そうしてこそ私たちは未来を築くことが出来るのだと。

細井明美 (ほそい・あけみ/本誌編集委員)



事務局だより

ようやく秋の気配を感じるようになりました。年を重ねると気候の変化にも敏感になるのでしょうか。この数ヵ月間も、頭にくる、イヤなニュースで満ちあふれています。従軍慰安婦、徴用工への個人補償と謝罪に一切向き合わない日本政府の態度、表現の不自由展を中止に導いた名古屋市長、官房長官発言、ネトウヨ等々。

千葉県、神奈川県では先の台風の災禍で停電が続いて市民生活に大きな支障がでている最中、内閣改造が行われ、第4次安倍政権が発足。論評に値しない顔ぶれですが、安倍は以前にもまして改憲への野望をむき出しにし、「全世代型社会保障」の名のもとで年金、介護保障費の切り下げをさらに進めていきそうです。改憲も社会保障給付の切り下げも政権側の弱者切り捨ての分断策です。

今世界で移民排除、格差拡大などによる社会の分断が問題になっています。分断は一握りの権力者、政治家、マスコミ、経済エリートによって作りだされ、煽られ社会の一部勢力が同調して「ポスト民主主義」右派ポピュリズムを勢いづかせています。

誤解をおそれずに表現すれば、市民、社会的弱者の側からの権力者、ネトウヨ勢力に対抗する「分断」政策が必要だと思えます。政治、政党の役割とは本来特定の階層の利益を代表するものではないのでしょうか。社会的弱者の立場に立ちきる運動と政党が必要です。

吉田和雄（よしだ・かずお／本会事務局）



ピープルズ・プラン研究所〈「平成」代替りを問う〉連続講座 第2期第5回

現在の〈日韓関係〉を天皇帝の植民地支配責任をふまえて考える

安倍政権の対韓国外交は、かつての侵略・植民地支配の歴史を無視し、排外主義の姿勢を強めています。しかもこの政治姿勢が、日本の「国民」の少なからぬ心情的支持を引き出しているという、危機的状況のなかに私たちはいます。

韓国・国会議長文喜相の2月7日の〈戦犯の主犯たる天皇の息子は韓国人慰安婦への直接謝罪を！〉という韓国人の立場からすればあたりまえの声に、政府・マスコミは「昭和天皇を『戦争犯罪者』にして、しかも謝罪を要求するなどんでもない」と

喧伝しました。

そして今、十月の天皇の「即位」にトップの文在寅（ユン・ジェム）韓国大統領を参列させることが、対立の打開策だなどという元日本外交官（美根慶樹）の声がマスコミの中に浮上しています。

象徴天皇の三回目「代替り」に絡み、朝鮮半島での天皇の植民地大権による支配の歴史をふまえた上で、日本の戦後史を正面から批判的に検討する予定です。

この講座は「市民の意見30の会」編集委員会との共催です。積極的ご参加を！

*問題提起

・問われなかった植民地支配責任

内海愛子（歴史社会学、戦後補償論）

・「侵略」神社の歴史

辻子 実（靖国参拝意見訴訟の会）

・天皇の「植民地大権」をめぐる

天野恵一（反天皇制運動連絡会）

・司会／松井隆志

（ピープルズ・プラン研究所）

*日時 12月14日（日）午後5時から

*場所 ピープルズ・プラン研究所

（東京都文京区関口1-4-4-3 信生堂ビル2階／電話 03-6424-5748）

*主催 ピープルズ・プラン研究所、

「市民の意見30の会」編集委員会

市民意見広告運動

アンケートご協力

ありがとうございました

りがとうございました。

紙面をご覧になって80パーセント以上（120人）の方が大変良かった、良かったと回答くださり、ホッとしている反面、どちらともいえないが8パーセント（12人）悪かったが2・7パーセント（4人）あり、この方々のご意見を真摯に受け止めなければならぬと思っています（別表参照）。自由記述のなかから多かったもの、印象に残ったものを挙げてみます。

「ひと」というキャッチフレーズはよかった（多数）／「武力で平和はつくれない」その通りと思う（複数）／「勝つ」というフレーズに違和感がある（複数）／毎日新聞・産経新聞への掲載を希望する／本文が

本年5月3日に朝日新聞、読売新聞、東京新聞、中日新聞に掲載された意見広告「安倍改憲に勝つ！」の賛同者の皆さまに掲載紙の別刷り、本誌（会計報告掲載）を送付した際に、アンケートを同封しました。8月30日までに146名の方々から回答がありました。回答くださった皆様あ

長い、硬い、わかりにくい／新聞以外のメディアにも／読売新聞への掲載はよかった、悪かった（両方あり）／などです。

すべてのご意見は市民意見広告運動のホームページに掲載されていますのでご覧いただけますが、職場で多くの方々の賛同を取りまとめくださった教職員組合の方からのご意見を、自戒をこめてご紹介しなければと思います。要旨をまとめました。

「安倍政権に勝つ」という大見出しは読売新聞読者も含め、広範な市民に憲法の価値を「伝える」ためのキャッチフレーズになっていない。学校教職員に広くよびかけて賛同を集めたが、この紙面を教員室の掲示板に張り出すのはためらわれる。「憲法は大切」という思いは職場で一致していても、「反安倍」というコトバは一致点ではない。

「安倍改憲に勝つ」は賛同チラシのキャッチコピーに使ったものを新聞紙面にもとの考えから決めたのですが、このご意見をいただき、賛同チラシと新聞紙面では訴える対象がちがうのかもしれないという意見が出されました。引き続き議論を重ねてまいります。

参議院選挙が終わり、改憲発議に必要な3分の2を自公維で確保させることだけ

は、かろうじて避けることができましたが（それも数え方によっては怪しい）、9月の自民党役員人事、内閣改造では安倍氏のなにがなんでも「改憲」という姿勢をより鮮明にしています。市民意見広告運動は、この動きをこちらなんとしても止めるべく、11月下旬の始動に向けて準備を始めています。スタッフも引き続き募集しております。週に1回2時間でも、入力、発送などのお手伝いをしていただける方からのご連絡、また人の心を動かす言葉に関するアドバイスをお待ちしております。

今期意見広告のアンケート結果

大変良かった	56	38.4%
良かった	64	43.8%
どちらともいえない	12	8.2%
悪かった	4	2.7%
大変悪かった	0	0.0%
記入なし	10	6.8%
	146	100.0%

北原博子（きたはら・ひろこ）市民意見広告運動事務局

☆今に繋げる市民の自発的工夫でつくられた反戦市民運動

神奈川県川崎市

6月30日多摩平和イベント実行委員会主催の「反戦・平和市民運動」の会に参加した。吉岡忍さん、大木晴子さん、若手の神子島健さんのシンポの話は、当時のベトナム反戦市民運動が自発的に市民の工夫でどうつくられていったかを、明るく語られて聞き入れやすい会だった。

今日の市民運動に繋げる意図を感じた。映像の上映も歴史的な基礎を踏まえ構成が優れている作品。若い人に分かりよい。参加140人、多摩市長の挨拶もある開かれた集会だった。

☆女性と弱い者達中心の集いを

東京都町田市

毎号、読みごたえいっぱいです。前号(174号)の「横浜市議選に立候補した広越由美子さんの選挙戦」、「西郷南海子さんの講演」、新鮮かつ説得力充分な現実的方法論。171号の阿部知子さんの議員経験プラス面と(それ故の固定概念は除いて)合わせて「女性と弱い者達中心の集い」(「党」のことばは

どうも……)できないものでしょうか。

☆若者に期待する

大阪府池田市

オキナワ、フクシマは語らず。「安倍首相は……」で始まるニュース。インターネットを使いこなす若者に期待。その支援を精いっぱいやっていきたい。

☆政権をかえよう

神奈川県横浜市

アメリカ従属をいつまで続けるつもりなのか? 民意を尊重しない政府をいつまで維持するつもりなのか? どうするつもりか10万年保管の必要な核のゴミ。政権をかえるしかない。(67歳、隠居)

☆無党派市民、リベラルの培養剤となれ

東京都練馬区

市民の意見の会が、無党派市民、リベラルの接着剤となるよう願っています。

☆頑張っている人たちがいる、自分もと

神奈川県秦野市

いつもではないのですが、今回の「市民の意見」の多くのページが赤線で一杯になりました。特に皇室問題、そして絶対平和は勉強になりました。

いろんな人が頑張っていることもわかり、自分もと思った。

☆又くり返すのか戦争を

東京都調布市

市民の意見の長年の読者です。天野恵一氏の反天皇制運動に賛成する者です。物事を曖昧にする日本人、戦争責任をとらない天皇、天皇制、政治家、軍人、特高警察、そのままずるすると組織もひきついで今に到る。そして又くり返すのか戦争を。

苦言を一つ。対談で対話している人の名がないのは何故? 匿名はキライです。

☆行政の不当介入を許さないぞ!!

東京都世田谷区

「表現の不自由展」が悲しいかな、中止になってしまいました! 行政の不当介入を許さないぞ!!

☆知らなかった、騙されてた、で済まされない

神奈川県藤沢市

知らなかった、騙されてた、で済まされない暗黒の世界への逆戻りで、(例)嫌韓・反中のオンパレードに、いかにどう立ち向かってゆくのか。あおりのムードが蔓延し

ていて歴史認識のへったくれもない。知らされずに闇に葬られる雰囲気はどう個人が立ち向かうか、日々の課題です。

☆わかりやすい天野さんの会話文、感動した本田さんの文

千葉県船橋市

天野さんの「会話的文」はわかりやすく良い。ただ、共産党や渡辺治さんらをあれだけ「悪者」にしてしまうと「かすかな希望」を消すことにならないかな。本田さんの『奪われたクリムト』感動した!!

☆米軍の軍事利用度が増す福岡空港

福岡県福岡市

国交省は、今年12月5日に福岡空港の回転翼機能を移設する「雁の巣ヘリポート」の供用を始める。23機の民間ヘリコプターを移転させると、民間空港で唯一、米軍が占用地を持つ福岡空港の米軍の軍事利用度は増す。

☆いたたまれない、ヘイトの思い通りになった

北海道旭川市

「表現の不自由展・その後」が中止に追い込まれた。ヘイト信奉者どもの思い通りになったことがいたたまれない。これでヤ

ツらは勢いづく。いよいよこの国はヤバくなって来た。

☆各誌それぞれ特徴と共通の主張もある

兵庫県神戸市

岩波『世界』、『週刊金曜日』と併せて本誌を読んでいます。それぞれの特徴が参考になります。とはいえ共通の主張も多々あり面白いです。(79歳、女性)

☆反日デモに参加したい

北海道千歳市

現在も隣の韓国で様々な反日運動が続いています。私はこの年齢(85歳)になっ

ても、その反日のデモに参加し「日本は1910年から1945年までの35年間の野蛮な行為を心から反省しろ」というプラカードをにかけて行進したいです。

☆偏狭な歴史認識を追及しない報道

愛知県豊橋市

現在の最悪な日韓関係の元凶が安倍首相の偏狭な歴史認識にあることは明白なのに、そのことを指摘し続ける報道のないことが残念です。

市民の意見30の会・東京 2019年7月～8月会計

収支計算書

収入の部		支出の部	
一般会費	262,000	印刷費*3	0
協力会費	155,000	発送費*4	240,180
敬老会費	470,000	編集経費*5	57,992
グリーン会費	0	旅費交通費*6	133,540
(会費小計)	887,000	家賃	240,000
カンパ	140,000	通信光熱費	18,227
事務所費分担*1	200,000	事務経費	18,148
雑収入*2	400	銀行手数料	1,728
受取利息	7	諸会費	7,452
収入計	1,227,407	支出計	717,267
		収支差額	510,140
前期繰越	12,409,476	当期残高	12,919,616

貸借対照表 (2019年8月31日現在)

資産の部		負債・資本の部	
現金	27,276	預り金*7	173,000
預貯金	14,788,875	FIY基金	2,203,535
敷金	480,000	正味財産	12,919,616
合計	15,296,151	合計	15,296,151

(*)1意見広告運動事務所経費分担金。(*)2グッズ販売。
(*)3会報175号分未払い。(*)4会報174号分。(*)5執筆謝礼図書カード、通信交通費、ほか。(*)6事務所通所費ほか。(*)7意見広告運動賛同金預かり分。

◆編集委員

阿部めぐみ、天野恵一、有馬保彦、岡本和之(次号担当)、北原博子、杉内蘭子、高橋武智、西田和子、細井明美(今号担当)、本野義雄、野澤信一、諸橋泰樹、吉田和雄

編集後記

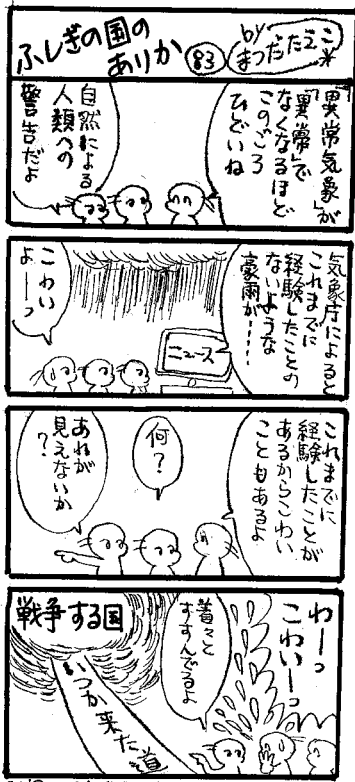
◆この度、健康上の理由で、長らく書かせて頂きました映画紹介の欄の担当を下りることになりました。2006年8月刊の第97号以来、約13年間担当したことになります。読者の皆様の暖かいご支援に心からお礼申し上げます。

◆ここで、かつて予告した福富節男さんの論文集『僕がデモ屋になったわけ』、発行ピープルズ・プラン研究所)がやっと、いやついに完成しました。

次号で紹介されると思いますが、800円のパンフレットです。関心ある方は、手にしてください。

(天野恵二)

◆先日高齢の父がゴルフ会員権を売却した。会員権売買の仲立ちをする業者の人



2019.7.26.5PM*

がいうには、ゴルフ会員権は土地の権利証のようなものだそうで、それが財産として価値があるのは他国から侵略される恐れのない島国日本だけだそう。父の会員権は買った時の十分の一度程度になってしまったが、いまでも、超高額の会員権もあるという。そんなゴルフ場の会員である政治家は自分の財産の価値の所以を考えたことがあるだろうか？

◆さる9月19日、東京地裁は福島第一原発事故の業務上過失致傷罪での東京電力旧経営陣3人への無罪判決を言い渡した。判決は言う、〈原子炉等規制法や審査指針などからすると「原発の自然災害に対する安全性はどのようなことがあっても放射性物質が外部に放出されることは絶対にない」といった極めて高度なレベルではなく・・・〉。スリースマイル原発事故、チェルノブイリ原発事故など、フクイチの事故前に起きた原発事故は、「絶対的安全」が求められるはずだ。また、東電は、政府機関の巨大津波の予見について知りつつも、企業コスト増への配慮から、安全対策をしていなかった。このコスト重視の企業経営は、9月の台風15号での、送電設備の被害、

千葉県広域での停電被害をもたらした。人が大事か、企業経営が大事か、明らかにはずだ。

(有馬保彦)

◆福島第一原発事故に関して東電旧経営陣が強制起訴された裁判の判決は、勝俣元会長ら3被告は全員無罪となった。これでは、家族、家屋敷を失い生業を奪われ未だに生活再建の見通しも経ってない多くの犠牲者が浮かばれない。告訴団長の弁護士は会見で「司法の歴史に汚点を残す判決」と指摘していたが、あれだけの事故を起こしておきながら誰も原発事故の責任を取らないこんなひどい判決は見たことがない！(西田和子)

◆1960年代は石炭がエネルギーの主流だった。資源のない日本で珍しく豊富な埋蔵量を誇った。筑豊炭田を舞台にした『青春の門』(五木寛之・著)が、当時の空気を反映しているように思える。しかし、いつしか石油に代わり、そして70年代の第1次石油ショックの後、エネルギーは石油から天然ガス、再び石炭(安価な外国産)、原発へと移っていく。2011年の原発事故後は、日本のエネルギーを天然ガスと石炭の化石燃料が担っている。世界(特にヨーロッパ)は脱炭素社会、再生可能エネルギーに向けて動いているというのに、いまだに日本は具体的な政策も出せないでいる。70年以上、何も変わっていないということか。(細井明美)